

# 海人の生活史—徳島県美波町阿部のアワビ漁に関する生態人類学的研究—

指導教官 内藤直樹

徳島大学総合科学部社会創生学科地域創生コース 1010030794 八木大斗

## 第一章 はじめに

第一節 研究の背景

第二節 先行研究

## 第二章 対象地域の概要

第一節 阿部地区

第二節 伊座利地区

第三節 西由岐地区

## 第三章 阿部の概要

第一節 生業活動

第二節 歴史

第三節 現在の阿部の漁業

## 第四章 アワビ漁について

第一節 アワビの生態

第二節 経済活動としてのアワビ漁

第三節 阿部の資源管理

## 第五章 アワビ漁の特徴

第一節 阿部のアワビ漁

第二節 漁法・漁具

第三節 出漁日数

第四節 漁獲物・量・高

第五節 漁場の認識利用

第六節 水揚げの場としての漁協

## 第六章 海人の生活史

第一節 中途Uターン海人

第二節 定年退職の海人

第三節 二拠点居住の海人

## 第七章 分析と考察

## 第一章 はじめに

### 第一節 研究の背景

徳島県南部沿岸部に位置する美波町阿部は昔からアワビ漁が盛んな地域である。周辺の市町村と同じく過疎高齢化がすすむ地域であるものの、夏になると多くの人々が海に出て素潜りで漁を行っている。筆者は 2012 年の夏、大学の実習で阿部に赴いた際、阿部の浜を歩いていると、数人のとても元気な海人とすれ違った。彼らはみな、手にはそれほど多くない量の貝を携えていた。高齢であったが、ハツラツとしている姿が印象的であった。また、それぞれの人に詳しく話を聞いていくと海人の多くが一度阿部の外で勤めていた人や定年を迎えて阿部に戻ってきた人たちが多かった。

このような過疎高齢化がすすむ地域において、高齢者がわずかな漁獲量しかない漁業を行うことにどのような意味があるのか、そして彼らの行う漁とはどのようなものなのかという疑問が、この研究を行うきっかけである。彼らが海という自然環境といかに向き合い、何を行っているのか、そしてそれは人びとにとってどのような意味をもっているのかということのアワビ漁の生態や漁師の生活史の分析を通して明らかにしていきたい。そして、漁業における人と自然の関係という観点から、過疎高齢化が進む徳島県南部地域における漁村の持続的発展の可能性について考えていきたい。

### 第二節 先行研究

松井（1998）は生業研究の中で漁労に注目し「マイナー・サブシステム」というものを提唱している。マイナー・サブシステムとは「いつも、集団にとって最重要とされている生業活動の影にありながら、それでもなお脈々と受け継がれている副次的ですらないような経済的意味しか与えられていない生業活動」（松井 1998：248）のことである。松井によるとマイナー・サブシステムは①伝統的、②取得から消費または販売までがごく直接的につながっている、③技術は単純であるがゆえに高度な技術が必要とされる、④経済効果以上に、喜びや誇りをもたらす、⑤大量に狩猟採集されない性質、⑥大きな設備投資を必要としない、といった特徴をもっている。こうした特徴からマイナー・サブシステムは機械化された生業活動とはまったく別の位相を身体を通して体感させる。「自然と人間との相互の関わり方の本来的な位相関係を深く認識」（松井 1998：266-267）させるのである。また、菅（1998）は伝統的に続く日本の新潟県大川のサケ漁を事例に、マイナー・サブシステムという経済的には重要性の低い副次的な生業の中に人づきあいや競争、偶然の楽しみといった“遊び”としての側面を見出した。大川のサケ漁はサブシステムとしての経済的意味を失っていた。だが菅は、サケ漁を通じた漁仲間、家族・親族、ムラ内の人間、同僚などとの濃密な付き合いを描き、その伝統が続いていることを主張した。具体的にはサケ漁を通じた漁場の小屋の貸借、オトリ漁における元気なサケの貸借などの交渉や捕ったサケの贈答を通じた交渉などが行われていた。大川のサケ漁では漁期になると自分の漁場の近くの漁小屋にこもることがある。しかし、それぞれの漁小屋にはそれを建てた所有者があり、毎年漁場が変わるので、それに合わせて他人の小屋を借りたり、自分

の小屋を貸したりする。小屋の貸借関係では対価が要求されることはなく、漁仲間のつきあいのなかで貸し借りは当然のものともみなされている。その貸借関係は親しさを確認するものとして喜ばしいことと考えられている。また、こうした漁仲間同士の閉じた付き合いだけではなく、家族や友人などにサケを贈答することもおこなわれている。そこでは大川のサケ漁の特徴である小規模個別性は、捕れたサケへの関心、執着を強くする。サケはサケ漁の戦績を多くの人々に伝えるトロフィーであり、ささやかな自慢を遠慮なくできる媒体なのである。こうしたことから、人々をつなげる親密な付き合いを創出する機会として、現在でもサケ漁は楽しまれていた。また、そうした親和性だけではなく、漁師の競争性も伝統サケ漁を魅力的なものにしている。小さな集団規模での漁業であるため、誰がこれだけ、どこで捕ったなどという情報が伝わりやすく、情報の素早い浸透が競争心を煽っている。また、カワワケと呼ばれる漁を行える場所の確保は入札によって決定される。この場所の見極めがサケ漁師の技量の一つとして重要視されているため、サケ漁における技術に加えて、こうした漁を始める前からの競争が“楽しみ”としサケ漁へと人を惹きつけていくのである。

また、このカワワケの際に様々なかけひきが行われる。自分の狙っている漁場を周りの人たちに悟られないようにわざと否定的な評価を下したり、どうしてもよい場所に良い評価を下したりするのである。こうした単純な舌戦から始まり、カワワケの入札の際に他の人たちの顔色を窺いながら入札をするなど、カワワケの際にはかけひきが行われている。しかし、こうしたかけひきの末に目当ての漁場を手に入れたとしても必ずしも多くの漁獲が得られるわけではない。ムラで一番良い漁場とされる場所を高額で落札したとてシーズンが終わってふたを開けてみるといまひとつの漁獲であったという事も少なくないのだ。このような場所を決める際のかけひき、不確実性を実力競争のサケの中に盛り込み、賭けの要素を与えることで、えもいわれぬような“楽しみ”をこのサケ漁に与えている。

そしてこうした楽しみの要素が伝統を継承していくためには重要であるとした。しかし菅はマイナー・サブシステムの遊びとしての側面を「実社会における生活の規制や束縛から解き放たれた、自由で主体的な自己目的的、自己完結的な非生産活動としての純粋な“遊び”ではない」(菅 1998:244)と述べ、「生業あるいは労働と“遊び”を二分法的に対立するものとして考えることは無意味」(菅 1998:244)であると主張した。ここで重要なのは確かに大川のサケ漁は経済性や生産性を失ったかもしれないが、仕事や労働の対概念としての「余暇」になったわけでもないということである。なぜなら、そこでサケ漁をおこなう人々はそれまでの経済的な活動としてのサケ漁歴史を背負っているし、サケを捕る権利はそこで生活する自分たちの財産であるという意識が払拭されていないからである。マイナー・サブシステムとは生業の零落したものと思われがちであるが、むしろ生業活動のもつ経済性が失われる中で“楽しみ”の要素が強く現れるようになった結果、その“楽しみ”こそが活動を維持する原動力となったのである。松井(2004)は、社会の変化によりマイナー・サブシステムのあり方が変化していくことを指摘した。もともとマイナー・サブシステムは、地域のサブシステムの中で人々の生活を支えるメイン・サブシステムを補足する役割として機能していた。たとえば、東南アジアの田舎では水田の畦に生えている樹木の若葉や畦の雑草などを取って食用にするのがマイナーな食物生産の補充であった。しかし徐々に外部世界からの技術や資本、知識の導入によりメジャー・サブ

システムが能率化されるなかで、現金収入の希求によりそれまでメジャー・サブシステムを複合的に支えてきたマイナー・サブシステムは切り捨てられていく。だが、その後ある程度の現金収入が可能になり、機械化がある水準に達すると現金収入への希求は一定の平衡期に入る。この時にマイナー・サブシステムがもう一度顧みられる。そしてその時に現れるマイナー・サブシステムは、主要なサブシステムを補完するような単純なマイナー・サブシステムとは少し違った意味を持ったものとなる。それはメジャー・サブシステムが現金収入を最大化するように再構成された後のマイナー・サブシステムは、以前のようにメジャー・サブシステムを補足するものとして大きな位置を占めることはなくなるからである。こうしたマイナー・サブシステムの回顧は、人々に機械化や現金経済への適応などで失ってしまった自然との直接的な付き合いの楽しさをもう一度教えることとなる。このようにマイナー・サブシステムは社会の変化の中でその意味を変化させることで、社会や経済とのかかわりの質を変えてきたのである。

また、大村（2008）は「イヌイトにとって生業とは単に生きるための糧を得る手段ではな」（大村 2008:37）く「環境と密接な関係を取り結ぶことによって、環境と一体化して生きる幸せを実感しながら自らのアイデンティティを確認する実践」（大村 2008:37）であるとした。イヌイトの環境に関する伝統的知識は「自然と人間を分離せずに一体的な全体として捉える一元的な世界観に基づいて」（大村 2008:39）いる。たとえば、イヌイトは 1/250,000 の地形図の上で半世紀も前の 1950 年代の 5 年間にたどったルートを毎年克明に辿り、その 5 年間に辿られたルートの細微な差異を含めてその時々々の生業活動の様子を時間軸に沿って子細に再現したり（大村 2005）、アザラシ漁の際のホッキョクグマと遭遇をあたかも目の前に相手がいるかのように身振りを交えながら再演する（大村 2008）。こうしたことから、イヌイトにとって環境とは人間と切り離された自然ではなく、自然とイヌイトの社会は分かちがたく織り込まれているのである。そして自然と関係を取り結ぶということは社会的なかかわりに参加しながら、自然とともにあるイヌイトになっていくことなのである。イヌイトとしての喜びや幸せは生業活動を実践することそれ自体と一体となっており、かかわりあうことそれ自体にある喜びや幸せが生のあるあり方を開示するのである。

#### ・自然保護思想における生業活動への視点

鬼頭（2010）をもとに、19 世紀以降の欧米における環境哲学や環境倫理学を中心とした自然保護思想をめぐる議論について整理する。18 世紀から 19 世紀にかけての産業革命やアメリカ開拓の時代には自然とは人間によって秩序づけられるものであって、征服し、管理されるものだとされてきた。そのため、森林の乱伐や移民者などによる開拓によってアメリカンバイソンやリョコウバトなどは大量殺戮され、多くの種が絶滅していった。そうした反省から自然を保護するという概念が 19 世紀後半に登場し、自然の価値として、材木を切り出すような経済的価値だけでなく、レクリエーション的価値や景観的価値などを強調した。しかし、これは最終的には人間の将来の消費のために天然資源を保護するという「保全」という考えに立つものであった。「保全」の観点からは自然は人工的に管理され、レクリエーションのために確保される自然とされてきた。その後、1970 年代には、それまでの「人間が利用するから自然を保護する」という人間中心主義の発想を根本的に反省し、自然保護とは保護する自然そのもののために行われるべきだという考え方へ転換し

ていった。その後、人間中心主義から人間非中心主義への転換を象徴付ける思想が次々と出現することとなる。その中のひとつがディープ・エコロジーという考え方である。ノルウェーの哲学者アルネ・ネス（1973）は、従来の環境保護の根底にある考え方を、汚染や資源枯渇に反対しているが最終的には先進国に住む人たちの健康と繁栄を意図しているだけの「シャロウ・エコロジー」と排し、それに代わるものとして「ディープ・エコロジー」を提唱した。ディープ・エコロジーは、生命体や人間を個々の独立した存在として捉えるのではなく、相互に関連している存在と捉えることが重要であるとした。ディープ・エコロジー思想の中でも重要な位置を占めるのが「原生自然＝ウィルダネス」の保護という概念である。「原生自然＝ウィルダネス」とは、人間がそこに介在しなくても自然それ自体に価値があるというという考え方である。しかし、こうした「原生自然＝ウィルダネス」の考え方はその地域に生活し生業を立てて暮らしているひとたちの思想ではなく、都市化した地域からの旅行者の視点に立つ思想であった。たとえば第三世界で先進国の環境主義者が「原生自然＝ウィルダネス」の概念に取りつかれることにより、結果的に第三世界における環境問題における土壌流出、大気、水質汚染、貧困などのようなもっと解決しなければならないことから目をそらしてしまっていることも指摘されている。（グーハ 1989）そうしたことから「原生自然＝ウィルダネス」という概念をそれ自体普遍的に価値あるものとして捉えるのではなく、時代的、地域的文脈に出現したものであることを認識し、人間と自然との深い関わりあいのあり方を主軸に環境倫理を考えていく必要がある。よって、環境倫理思想を考える際には彼らの自然観、自然に対する様々な思いや生業の営みとの関連を考えることが重要なのである。しかし、従来の環境倫理思想では人間の「生業」という営みをきちんと見つめることができていない。それはその思想が依拠している背景には人間と自然の二項対立的な図式があるからである。人間の自然とのかかわりの基本的な形が「生業」であるにも関わらず、環境倫理の問題は人間中心主義か人間非中心主義かという人間と自然を二つに分けて考えているのである。人間の自然への働きかけの基本的で重要な「生業」という営みを人間と自然の単純な二分法の中で否定的に捉えるのではなく、むしろ生業こそが人間と自然のかかわりそのものであると考え、人間の基本的な生業にきちんと考察を加えていくことが重要である（鬼頭 2010）。

### 第三節 研究目的と方法

阿部の漁師たちが海という自然環境といかに向き合い、何を行っているのか、そしてそれは人びとにとってどのような意味をもっているのかということをも潜水漁の生態や漁師の生活史の分析を通して明らかにしていきたい。そして最終的には漁業における人と自然の関係という観点から、過疎高齢化が進む徳島県南部地域における漁村の持続的発展の可能性について考えていきたい。

#### ・開発人類学の視点から考える開発

最終的に漁業の持続的発展を模索するにあたり、開発人類学の視点に立ちその可能性を探っていきたい。そのため、開発人類学の視点からみた開発について触れておく必要があるだろう。一般的に地域おこしを含む開発事業を成功させるためには、「内容的知識」と「文脈的知識」の両方が必要となる。内容的知識とは「過程、作業、方式、すなわちある

仕事を達成するために必要な諸々の手続きに関する詳しい情報」(Nolan 2007:22)のことであり、文脈的知識とは「事業が実施される環境についての理解」(Nolan 2007:22)のことである。たとえば、内容的知識とは、アラビア語の語彙と文法を知ることである。また、文脈的知識とは特定の結果をもたらすために、特定の時に特定の人に向かってアラビア語で言うべき適切な言葉を知ることである。しかし、これまでの開発プロジェクトではこの内容的知識と文脈的知識の二つが日常的作業において分離してしまうことが多かった。具体的には道路や建物と村民の利用パターンとの相互関係を理解していない建築家や、地域の疾病概念が健康管理にどう影響しているか理解していない医師などによって、開発プロジェクトの対象となる地域の文脈的知識は無視されてきた。だが、開発プロジェクトを成功させるためには政策に含まれる文化的諸前提と対象地域社会における諸前提とが適合することこそが最も重要であり、このような文脈的知識の側面を無視した開発の多くが失敗を重ねてきた (Nolan 2007)。それゆえ、開発の現場において人類学が提供しうるものとは「文脈を理解する手段、そしてその文脈を双方に満足のいく形で開発計画や実施に織り込んでいく手段」(Nolan 2007:23)である。

#### ・調査方法

2013年7月23日から28日、8月31日から9月10日、12月10日から13日の計3回、のべ21日間徳島県美波町阿部で現地調査を行い、アワビ漁の生態に関する参与観察および漁撈活動や環境認識に関する聞き取り調査および漁師の生活史に関する聞き取り調査などを行った。

## 第二章 対象地域の概要

本章では対象地域の阿部地区の社会-経済的な特徴を明らかにするために、美波町の阿部地区、その東隣に位置する伊座利地区、および阿部地区の南側に位置する西由岐地区(図1)と比較しながら概要を説明する。



図1 美波町の地図

徳島県美波町は2010年現在、総人口が7765人であり、そのうち3193人が65歳以上で、高齢化率が41.1%と高齢化が進んでいる。(総務省統計局2010)人口も2005年度から961人減少しており過疎高齢化が進む地域である(総務省統計局2005, 2010)。阿部・伊座利・西由岐もまた、過疎高齢化がすすむ地域である。

#### 第一節 阿部地区

徳島県美波町阿部は、美波町の最東端の伊座利から絶壁の荒磯を約3キロメートル余り西南へ下った地点に存在する。南側は太平洋に面し、集落の背にあたる北側は標高440メートルの明神山を頂点とする海部山脈が走り、西には由岐駅のある本町までの間を372メートルと高山が居すわっており、その尾根を海際まで伸ばしている。東側も同じく明神山の左肩がそのまま海まで張り出している。

2010年度の国勢調査によると面積は約6.3k㎡である。総世帯数は121世帯で、総人口は244人であり男女の内訳は(男113人:女131人)となっている(総務省統計局2010)。65歳以上の人口は127人であり、人口の約52%が高齢者という少子高齢化が進む地区である(総務省統計局2010)。

阿部は昔から「陸の孤島」と呼ばれ、ながらく海上交通が主であったが、昭和32年には阿部まで県道が開通し、同33年には徳島バスが一日一往復、同35年には伊座利まで運行されるようになった(由岐町教育委員会1994)。平成25年現在バスは一日4往復であり、利用する人もごくわずかである。

児童の減少により阿部の唯一の学校である阿部校(阿部小学校と由岐中学校阿部分校が合同)は最後の卒業生1人を送り出し、2011年3月16日に休校した。(阿部校HP

<http://www.abukou.minamicho.ed.jp/>)

阿部の主な産業は漁業である。その中でも主な漁獲物は、アワビとイセエビである。2012年の阿部漁協の漁獲量、漁獲高を示す表 1 をみても、アワビが大部分を占める貝類の漁獲高が占める割合が高いことがわかる。すなわちアワビ漁は、阿部の漁業をささえるメジャー・サブシステムのひとつであると言える。

	漁獲量	漁獲高
鮮魚	26.6 t	13,647,000円
貝	13.1 t	65,909,000円
その他		24,959,000円
計		104,515,000円

表 1 平成 24 年度阿部漁協の漁獲量・漁獲高(県漁連への聞き取りより作成)

阿部は江戸時代からアワビ漁が盛んであった。3 章にて詳述するが、第二次世界大戦直後の阿部では、復員による社会増や自然増により、大型定置網漁（大敷網）や福岡や和歌山での遠洋漁業が隆盛をみせる。しかし、大型定置網の不漁による大きな損失や遠洋漁業船での相次ぐ事故などから、これらの漁業は衰退した。だが、人びとが大型定置網漁や遠洋漁業に従事するなかでも、阿部では女性がアワビ漁を行っていた(由岐町教育委員会 1994)。阿部のアワビ漁は漁法の変遷のなかでも絶えることなく行われていた。

このように阿部は漁業が盛んな地域であるという伝統を活かし、地域おこしのために 2010 年には「阿部っ子シーチャレンジ」という漁業体験プログラムを実施している。内容はイセエビ漁体験や磯遊び、クルージングなどである。しかし、それ以降継続的にこのようなイベントは行われている様子はない。

こうした取り組みが失敗に終わった阿部であるが、2008 年現在の漁協の組合員数を見ると阿部漁業協同組合（以下、阿部漁協）の漁業就業者数は 85 人（農林水産省 2008）と比較的多いことが分かる。

## 第二節 伊座利地区

阿部と同様にかつて「陸の孤島」と呼ばれていた伊座利地区は美波町の東端に位置し、入り組んだ海岸線と三方を山に囲まれた漁村である。総面積は約 3.3k m<sup>2</sup>で総人口は 94 人、総世帯数は 41 世帯と小さな漁村である(総務省統計局 2010)。65 歳以上の人口は 21 人であり、人口の約 22%が高齢者である(総務省統計局 2010)。伊座利もまた過疎化により小学校が廃校の危機に追いやられた。だが、その後の伊座利の様々な取り組みにより全国各地から転入者が相次ぐとともに、地区で生まれ育った若者が集落に定着した結果、人口が増加していった。その結果、高齢化率が平成 13 年の 38.46%から平成 17 年には 27.64%へと低下(国土交通省 2008)していった。

伊座利は全国の都市部からの I ターン者と呼び込むために、1999 年に「おいでよ海の学校へ」という活動を始め、磯遊びやカヌー体験、定置網漁業体験など、海と触れ合う一日体験イベントを企画し、地区に活気を与えた。だが、これをきっかけに転入したいという人が現れても、転入者を受け入れる家屋がないこと、漁業以外に働く場がないことという問題が浮き彫りになってきた。そこで 2000 年に「伊座利の未来を考える推進協議会」を



結成し、伊座利校に地区外の子供たちを受け入れる漁村留学制度の導入やイザリ Café の新設といった地区活性化活動を開始した。漁村留学制度また短期滞在者の滞在施設の充実や I ターン者の働く場所の確保を図るためにイザリ Café というカフェを新設した。イザリ Café の一階はレストランで、二階を宿泊施設になっている。(伊座利の未来を考える推進協議会 HP <http://www.izarijin.jp/>)

・伊座利漁協

伊座利では敷網などの定置網漁が主であった。また、わかめなどの海藻採集漁などにも多くの人が従事していた。それは船を持っていなかった人たちが磯に出て採集していたのだと考えられる。

漁業名	数	従業人員	大正12年	大正13年	大正14年	大正15年	昭和2年	(円)
八田網	張2	44	315810	161200	288670	152905	376170	
鯔敷網	2	80	286600	151120				
鯔叩縛網	2	80	388650	516560	258900	576920	249370	
鯔追掛網	2	40	530170	341210	232000	50700	147590	
飯刺網	2	10	216080	205500	195950	358150	327700	
黒鯛刺網	2	10	50900	175080	42270		18780	
鯖建網	2	10	293280	335526	453210	605250	596050	
磯建網	75把	60	2130410	4253670	2122910	3505500	2754274	
鮑漁業		20	877420	1155490	1570090	1518900	2490500	
わかめ漁業		120	50780	37700	20100	13300	76800	

表 2 漁法別漁獲高 (由岐町教育委員会 1994)

伊座利では大型・小型定置網漁および夏季にはアワビ漁、秋にはイセエビ漁などが行われている。伊座利漁協の種目別の水揚げ(表 3)を見てみると阿部に比べ鮮魚の割合が高いことが分かる。これは伊座利の主とする漁法に由来する。伊座利では定置網漁の一種である大敷網・小敷網漁が主であり、10月から翌年の6月まで行われている。大型定置網漁とは沿岸近くの海中に、魚が入りやすいように魚の道筋を遮断する垣網をつけた網を張り、次第に網の奥へ誘導して魚を捕獲する漁法である。漁獲の際には複数の船で周囲を囲み、四方から網をたぐりながら上げていく。

	漁獲量	漁獲高
鮮魚	71.6 t	21,610,661円
貝	4.1 t	21,997,000円
その他		7,294,000円
計		50,902,000円

表 3 平成 24 年度伊座利漁協の種目別漁獲量・漁獲高 (県漁連への聞き取りより作成)

伊座利における漁業の中核をなす大型定置網漁(大敷網)の沿革について説明していく。

大正 14 年、高知県安芸郡津呂村松沢英一を代表として阿土大敷組合が設立され 11 月より事業を開始した。当初 33 名でありそのうち高知人が主であったが、その後高知人漁夫が次第に減少し、阿部・伊座利の漁夫が増えていく。そして名前を変えて明神大敷組合となった昭和 11 年には高知出身漁夫は 17 名となり同 13 年には 15 名となっている。

昭和 9 年には阿土大敷組合が明神大敷組合と名義変更し、戦後の昭和 22 年に伊座利大

敷組合となり、漁業組合が運営することとなる。しかし漁業不振によって多大の負債を生じた中止に至り昭和 39 年 9 月から昭和 46 年 6 月まで休業した。その後、昭和 40 年 8 月資本家による伊座利大敷組合となった。(由岐町教育委員会 1994)

大敷網は大敷網の経営は、昭和 9 年(1934 年)以降、明神大敷組合、伊座利大敷組合、東海水産、伊座利漁業生産組合、再び伊座利大敷組合と変わり、平成元年から大敷水産となった。また、小型定置網漁(小敷網)は昭和 37 年(1962 年)から始まった。(伊座利漁協 HP <http://www.izarijin.jp/gyokyo/>)

2008 年現在の伊座利漁協の漁業就業者数は 21 名である(農林水産省 2008) 水協法 68 条 4 項では「組合は、組合員(准組合員を除く。)が二十人(業種別組合にあつては、十五人)未満になったことに因つて解散する。」と明記されており、存続の危機と言っても過言ではない状況にある。伊座利は I ターン誘致の取り組みを行っており、多数の転入者を誘致している。これらの I ターン者に対して、伊座利漁協は組合員と同様の権利を与えており、学校の先生などにも採貝権を認めている(国土交通省国土計画局 2008)。今後の伊座利は、漁業に関する知識や技術に乏しい I ターン者を、どのような形で次世代の漁業従事者として組み込んでいくかが課題である。

### 第三節 西由岐地区

美波町西由岐地区は阿部の南側に位置する。人口は 372 人であり、世帯数は 171 世帯の町である(総務省統計局 2010)。65 歳以上の人口は 184 人であり、人口の約 49%が高齢者である(総務省統計局 2010)。西由岐地区には、特急も止まる由岐駅がある。西由岐は藩政時代の主要街道であった土佐街道が通じており、由岐における陸上交通の拠点となっていた(由岐町教育委員会 1994)。西由岐地区は旧由岐町時代に由岐役場があったところであったが平成 18 年には日和佐町と合併し、美波町となった。また明治 26 年に徳島～宍喰間の定期航路を開いて隔日就航していたり、昭和 14 年頃には由岐～阿部間の就航がはじまるなど、海上交通の拠点でもあった。商業の中心だった。そのため、現在でも人口は阿部、伊座利と比べると比較的多く、美波町の中で中心的な市街地のひとつである。由岐には西由岐漁協と東由岐漁協の 2 つの漁協があり、由岐港を二つの漁協に分けて利用している。西由岐漁協の漁業就業者は 61 名である(農林水産省 2008)。

	漁獲量	漁獲高
鮮魚	41.2 t	75,630,000円
貝	7 t	25,094,000円
海藻類	1.3 t	1,553,000円
計	49.5 t	101,878,000円

表 4 平成 24 年度西由岐漁協の魚種別漁獲量・高(県漁連への聞き取り調査より)

西由岐地区の漁師たちは藩政時代から一本釣りや延縄、定置網などによって生計を立てていた。その一方、採貝や海藻の採集に従事する人はごくわずかであり(由岐町教育委員会 1994)、現在でも表 4 から阿部に比べると採貝などの漁獲量が少ないのが特徴的である。昭和 57 年の漁業暦(表 5)を見てみると西由岐地区で行われている漁法のほとんどが大型の

漁船を使用する延縄や底引き網であることがわかる（由岐町教育委員会 1994）。

月・漁法	イワシ網	中型底引 (トロール)	小型底引 (セグス)	一本釣	延縄	刺し網・建網	モジャコ	カツオ
1月		↓	↑	↑ ↓ ↓	↓ ↑			
2月								
3月								
4月	↑	↓					↑ ↓	↑ ↓
5月	↑ ↓							
6月							↑ ↓	
7月								
8月								
9月		↑						↑ ↓
10月	↓			↑ ↑	↑ ↓	↑		
11月				↓ ↑ ↑	↑ ↓	↑ ↓		
12月			↓					
漁獲物				太刀 鯛 鱈	ドラフグ 甘鯛	イセエビ	モジャコ カンパチ	

表 5 昭和 57 年 西由岐漁協の漁業暦

以上の 3 地区を比較しながら見えてくるそれぞれの地区の特徴とは一体何なのだろうか。まず、挙げられるのは人口あたりの漁業就業者数の違いであろう。

3 地区をひとことで特徴付けるのなら、人口が多く由岐の中心的機能を有する西由岐地区、人口あたりの漁業就業者数が最も多く、漁業に特化した阿部地区、人口が最も少ないが I ターン政策などが功を奏し、徐々に人口増加や児童数の増加などをみせる伊座利地区、といえる。

地区の人口に占める漁業従事者の割合は、阿部は約 38%、伊座利は約 22%、西由岐は約 16%である。すなわち阿部は 3 地区の中で最も人口あたりの漁業に従事している割合が高い。また、人口減少への対策という観点では、伊座利は継続的な漁村留学などで大勢の I ターンを誘致する取り組みを行っている。実際に、現在では人口も徐々に回復し、児童の数も増加傾向にある。一方、伊座利と同じように「陸の孤島」と呼ばれた阿部でも漁村留学など I ターン政策は過去にとられたが、その後継続的には行われず失敗に終わっている。しかしながら、伊座利が漁師の再生産という課題を抱えている一方、阿部はそうした問題を抱えていない。

### 第三章 阿部の概要

#### 第一節 生業活動

第二章で検討したように、阿部の主要な生業は漁業である。阿部では農業はあまり盛んに行われなかった（由岐町教育委員会 1994）。その理由として、阿部では谷が狭く干害の被害が甚だしかったという。2010 年度国勢調査の産業別人口によれば、全体の就業者数 88 人中 35 人が漁業に従事しており、総就業者の約 40%が漁業に従事していることとなる（総務省統計局 2010）。

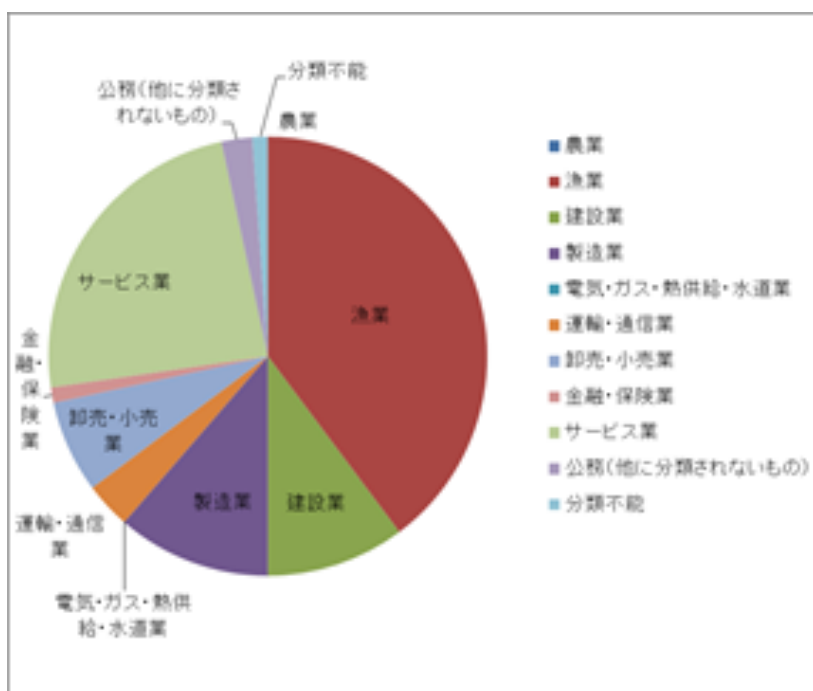


図 2 阿部の産業別人口（2010 年度国勢調査より）

月・漁法	イセエビ網漁	アワビ漁	ウニ	ワカメ漁業	ヒジキ	フノリ	イサリ漁業	一本釣り	イカ網漁
1	↓			↕		↕	↕	↕	↕
2									
3									
4	↓				↕				↓
5			↕					↓	
6		↕	↕						
7									
8									
9		↓	↓						
10	↑							↕	↕
11									
12	↓								↓

表 6 阿部の年間漁業暦（阿部漁協での聞き取り調査より）

阿部の漁業暦について検討する（表 6）。阿部の漁師たちは、10 月から翌 5 月まではイセエビ網漁、6 月から 9 月まではアワビ漁に従事している。イセエビ網漁は権利を与えられた家しか行う事ができず、現在 10 軒ほどの家しか行うことができない。そこでイセエビ網漁の権利を持たない家の人、友人のイセエビ網漁の手伝いをおこなう。朝早くから沖に出て網を揚げたり、その後の網の片付けや修繕を手伝ったりする。イセエビ網漁に使う網は一回の漁でイセエビの足などが絡まって破れることがよくある。修繕とはその破れた箇所を見つけ縫っていく作業のことである。そしてその修繕が終わると網を小さく畳み、次の漁に備えるのである。イセエビ網漁に従事できない人びとは、他にもイカ釣り漁に従事する。イセエビ網漁は朝早くから網を揚げに行き、昼間は網の掃除や片付け、修繕などを行わなければならない重労働である。さらに月が明るい夜には網が月光に照らされて見えてしまうためイセエビが網にかかりにくくなる。よって満月の夜を中心とする月が明るい時期には約 10 日間の休みがとられる。このようにイセエビ網漁は重労働であるが、月

齢に応じたまとまった休漁期間が存在することから、イカ釣り漁を複合して行うケースもみられる。また、また 3 月から 5 月には、鳴門にワカメ採集に出かける人や阿部の磯に出て海藻を採る人もたくさんいる。また、同じく 3 月から 5 月ごろには磯にワカメやモズク、フノリなど海藻を採集しに行く。イセエビ網漁は 5 月中旬に終了し、アワビ漁は 6 月の中旬ごろに解禁される。

これらの主要な漁以外には、伊座利の大型定置網漁にバイトとして参加している人、自分で小型定置網漁を行なう人、一本釣り漁で主にイサギやアジなどを釣る人などがいる。また、阿部ではアワビ漁に先立ち、5 月にウニ漁が解禁される。漁師の中にはウニを専門として採るものもいる。採ったウニは殻から身が出され、その身をアルコール漬けに加工する。瓶とラベルが漁協に売っており、加工したウニは規定の瓶に詰めて販売される。

## 第二節 阿部の漁業史

### ・藩政期から明治中期

ここからは出典にもとづき、阿部における漁業の歴史について説明する。藩政期には、浜庄屋と称されていた松村家と陸庄屋と称されていた喜多條家が網元として任せ網やブリ建網を経営していた。任せ網とは網船 2 隻、手船 3,4 隻、漁夫 30 余名を必要とするボラ廻網で、秋から春にかけてボラ・イナ・スズキ・タイなどを漁獲する、当時では大規模な漁業であった。アワビ漁に関しては、阿波藩から指定された特殊專業漁民としての「本海士」がアワビを採り、藩主に献上するかわりに分一銀を免除されていた。しかし、この時すでに藩から認められた者でなくてもアワビを獲って売っていた「小海士稼仕候者」が増加しており、彼らが採ったアワビは仲買業を兼業していた網元に買い取られていたという史料が残っている。だが明治中期になると、長年の濫獲の結果、沿岸回遊魚が減少してゆき、網元経営の漁業が衰退した。

### ・明治末期から第二次世界大戦

明治末期から続く漁業不振により在村の漁業従事者は少なくなり、漁獲も減少の一途をたどった。だが、「いただき行商」への従事者が増加した。いただき行商とは、阿部ではあまり獲れなかった米や麦などを求めるために阿部で獲れた海産物を頭上に乗せ、山を越えて近くの農家を訪ねては交換するという阿部の古くからのならわしである。最初はただの食糧交換であったが、明治に入るといただき行商で儲けられるようになり、村の男性の大半が行商に参加するようになった。しかし、支那事変以降の戦時中の統制経済により、阿部の「いただき行商」は完全に壊滅した。また、徴兵によって村には老人と女ばかりとなった。

### ・第二次世界大戦後から昭和 40 年代

太平洋戦争の復員や疎開などにより阿部の人口は増加した。昭和 21 年頃から由岐の遠洋

底引網漁業や博多の底引網漁船へ従事したり、和歌山の延縄マグロ漁などに従事する若者が増え始めたが、なお相当数の若者が村に残っていた。また伊座利がブリ大敷網によりめざましい漁獲を上げていたことに刺激されて、昭和 27 年に阿部大敷組合が作られた。昭和 28 年と 29 年の漁業種類別漁獲高（表 7）を見てみると、アワビ漁である採貝採藻業と大型定置網漁の漁獲高が高い。上層で大型の船を所持している人たちは、夏にはアワビ漁業、冬にはイセエビ網漁と延縄漁業をやり、その他の人たちは夏に海士、冬季にイセエビ網漁・はまち刺網漁・小型定置網漁・八田網漁を行う。家族経営であり、網を所有していない漁師は、夏はアワビ漁に従事するが、冬には大型定置網漁の従業員となるのが普通であった。（沖野舜二ほか 1956）

漁業種類/年度	28年度	29年度
八田網 (アジ)	478	0
磯建網 (海老)	2550	2420
一本釣 (イカ)	685	247
延縄漁業 (ワグ・アカモノ)	1186	1636
小型定置 (アジ・サバ・アイ)	1275	33
採貝採藻 (アワビ・テングサ等)	4301	7000
突ン棒 (サマコ・ウニ)	95	73
はまち漁業 (はまち・イサギ)	350	277
大型定置 (ブリ)	4346	9770
合計	15266	21456

表 7 昭和 28 年・29 年の漁業種類別漁獲高

しかし赤字続きのため昭和 32 年には大型定置網漁が廃止されたため、それ以降はアワビ漁の経済的地位は高くなったが、磯焼けなどによりアワビの漁獲量は減少した。このため村に残っていた青壮年男性らのほとんどが、遠洋漁業船に乗ったり、京阪神の工場労働者として離村したり、土建作業の工夫に雇われるなどしていった。（沖野舜二ほか 1956）だが昭和 34 年頃からは、遠洋漁業における海難事故が続き、リスクが高い割に魚価の低迷や燃油代の高騰により収入も悪くなってきたので離船して第二・三次産業に従事するものが多くなった。

・ 昭和 40 年代から現在まで

4 章 3 節にて詳述するが、阿部漁協は、アワビの資源管理制度を策定した。その結果、昭和 37 年以後はアワビの漁獲高が毎年増加し、昭和 49 年には昭和 40 年の 5.3 倍に達した。他地域における資源の減少にともなう価格の上昇もあいまって、昭和 50 年には水揚げ額が昭和 40 年の 10 倍に達し、阿部の総水揚げ額の 75%を占めるようになった。（沖野舜二ほか 1956）

阿部の漁業史を振り返ってみると、大型定置網漁が一時期隆盛を迎えるが、その後衰退し、遠洋漁業に従事するものも現れた。とはいえ、藩政期以降の阿部では、常にアワビ漁がおこなわれてきた。そして磯焼けや乱獲などによる資源の枯渇を経験した後の資源管理制度の策定を経て、今日に至っている。昭和 28 年から昭和 53 年における阿部の漁種別漁獲高の推移を表 8 で表した。この表を見てみても阿部ではアワビ漁が漁獲高の約半分を占めて

おり、アワビ漁が一貫してメジャー・サブシステムであったと言える。

漁業形態	あま漁業	磯建網	延縄	小型定置	大型定置	一本釣	その他	合計
主要魚種	アワビ・サザエ	イセエビ	カサゴ・エン	イワシ・アジ	ブリ	イサギ・サバ・アジ		
1953年	水揚額 4301 %	2550 16.7	1186 7.8	1275 8.4	4346 28.5	685 4.5	923 5.9	15266
1960年	水揚額 9125 %	4636 24.4	46 0.2	3688 19.4		1058 5.6	419 2.3	18972
1965年	水揚額 12312 %	7700 29.5	273 1	3297 12.6		812 3.1	1733 6.7	26127
1970年	水揚額 55535 %	16622 19.7	265 0.3	5027 5.9		3506 4.2	3494 4	84449
1975年	水揚額 193591 %	16157 6.2	70 0.3	7085 3.7		40170 20.7	3159 1.6	260232
1978年	水揚額 161009 %	20337 6.8	4711 2.9	8991 5.5		102646 63.6	2295 1.4	299989

表 8 漁種別水揚高の推移（由岐町教育委員会 1994）

### 第三節 現在の阿部の漁業

漁法別漁獲高（表 9）を見てみると海土漁業が全体の約 60%、イセエビ漁が約 24%を占めている。（阿部漁業協同組合 2012）

漁業形態	あま漁業	磯刺網漁業	延縄漁業	採藻漁業	小型定置網漁業	（円）
主要魚種	アワビ・サザエ	イセエビ	ガガネ、キンフグ	フノリ、ヒジキ	アジ、タチウオ	
水揚額	69204	27738	597	2983	7253	
%	61.5	24.7	0.5	2.7	6.5	
漁業形態	小型定置網漁業	一本釣漁業	タチウオ曳網漁業	その他	合計	
主要魚種	アジ、タチウオ	イサギ・カツオ	タチウオ			
水揚額	7253	2406	2012	228	112421	
%	6.5	2.1	1.8	0.2		

表 9 平成 24 年度漁法別漁獲高（平成 24 年度阿部漁協業務報告書より）

また、漁種別の漁獲高（図 3）を見てみるとアワビとイセエビで全体の 75%を占めている。（阿部漁業協同組合 2012）

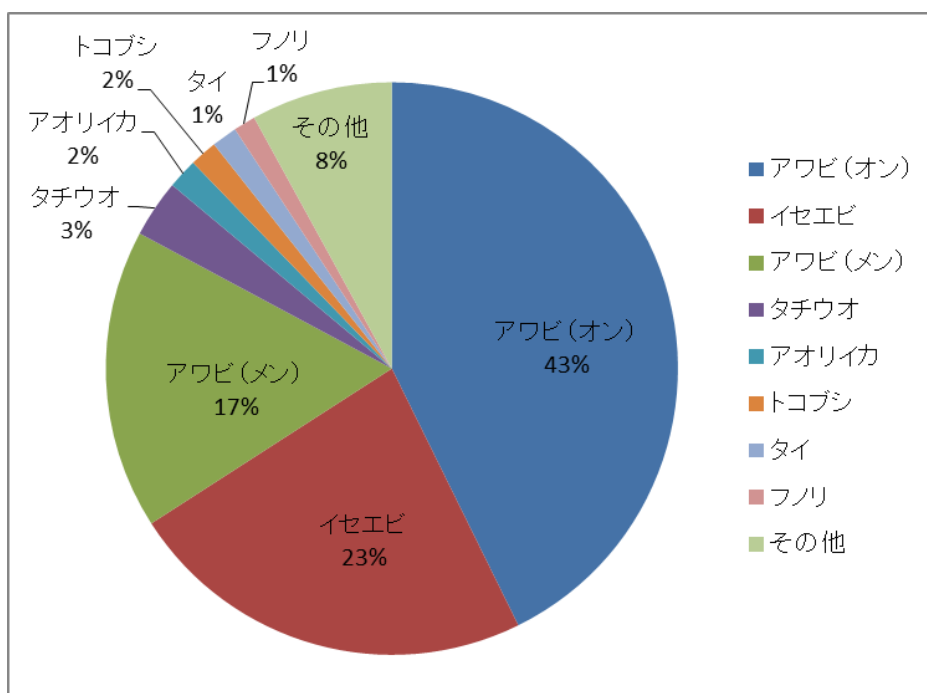


図3 漁種別水揚げ金額 (平成24年度 阿部漁協業務報告書)

クロアワビはkg単価約6000円、メガイアワビはkg単価約4500円で取引されている。また海人漁でアワビに次ぐ漁獲量を上げているトコブシはkg単価約2500円で取引される。

阿部漁業協同組合(以下阿部漁協)に所属する総組合員数は135人であり、うち正組合員が70名、准組合員が65名である。(表11)正組合員の年齢構成、さらには正組合員・准組合員の詳しい内訳は以下の表10,11の通りである。表10を見てみると60代・80代が多いことから、組合員の高齢化が進んでいると言える。だが40代で3人、60代の4人で新規加入者がいるというところから、新たな漁師のリクルートもなされていると言える。

30代	0	
40代	3	3人とも新規加入
50代	9	2人新規・6人相続
60代	17	4人新規・5人相続
70代	21	1人新規・2人相続
80代	18	7人相続
90代	2	
計	70人	女性15人
平均	71歳	

表10 正組合員の年齢構成と員数動向 (平成24年度 阿部漁協業務報告書より)

正組合員	漁業者	67
	漁業従事者	3
	うち女性組合員	15
	計	70
准組合員	地区内	31
	地区外	26
	組合員の家族	8
	計	65
合計		135

表11 組合員数の内訳 (平成24年度 阿部漁協業務報告書より)

	1未満	1以上2未満	2以上3未満	3以上4未満	4以上5未満	5以上	計
木	6	0	0	0	0	0	6
FRP	49	11	13	7	6	2	88
合計	55	11	13	7	6	2	94

表12 阿部漁協の管理する材質・トン数別漁船数 (平成24年度阿部漁協業務報告書より)

表12は阿部漁協の管理する材質・トン数別の漁船数である。舟のほとんどが3t未満の船であり、半分以上が1t未満の小型船である。実際に阿部に赴き漁港を見た際にも大きな船は見当たらず、沿岸に少し行くためだけの船がたくさん停泊していたのが印象的であった。この小型船はアワビ漁の際に沖に出る、もしくは遠くの沿岸への移動手段と使われる。



## 第四章 アワビ漁について

### 第一節 アワビの生態

アワビ属は、ミミガイ科に属し亜寒帯から熱帯にかけて亜種を含む 60~80 種類が含まれている。日本にはクロアワビ、エゾアワビ、メガイアワビ、マダカアワビ、トコブシが生息しており、八丈島以南、九州南部の亜熱帯域にはフクトコブシが主に生息する。クロアワビ、メガイアワビ、マダカアワビは本州千葉以南の太平洋沿岸、九州沿岸、北海道小島以南に生息するため、南方系アワビと呼ばれる。一方、茨城県以北本州太平洋沿岸から津軽海峡を経て北海道日本沿岸に生息するエゾアワビは北方系アワビと呼ばれる。また、阿部ではクロアワビ（学名—*Nordotis discus*）の事を「ムクロ」「オン」などと呼び、メガイアワビ（学名—*Nordotis gigantea*）を「メン」「アカ」などと呼ぶ。また、トコブシ（学名—*Haliotis(sulculus) diversicolor aquatilis*）は「ナガレコ」と呼ばれる。

アワビの産卵期は種類や場所、年齢などによってかなり相違する。トコブシは千葉県で 6 月中旬~11 月中旬、八丈島で 8 月中旬~10 月下旬と主に夏季に産卵が行われる。それに対してエゾアワビ・クロアワビ・メガイアワビは水温が 23℃~18℃に下降する秋冬の時期に産卵する。

アワビは夜行性の生物であり、摂餌・ほふく・呼吸などは夜間に行われる。クロアワビ・メガイアワビ両種とも日没後に行動をはじめ、餌場に達して摂餌した後再びほふくして日出前にほぼ一定位置に静止する。ほふくはクロアワビ・マダカアワビ・メガイアワビの順に不活発な傾向がみられ、よく動く個体で一夜にクロアワビで 85.2m、マダカアワビで 35.4m もほふくしたという。

アワビ類が生息する水域は岩礁と砂礫とが交互に組み合わせられて構成され、磯浜と呼ばれることがある。徳島県美波町の沿岸においても海岸から突出した岬や砂礫の浜の組み合わせによって構成されている。水深 5m のところにクロアワビが、それ以深の水深 15~16m までの岩礁にはメガイアワビ、マダカアワビが多く生息する。（小島 2003）また、アワビの住み場は洞穴・棚・亀裂・石の下・露天の 5 種類に大別される。洞穴とは岩礁や大型岩石の株空洞であり、棚とは岩礁側面の亀裂である。亀裂は棚と同様の形態の小型凹所であり、石の下は岩石の側面・下部空所、露天は岩礁・岩石の上面及び側面である。クロアワビは洞穴>棚>露天>亀裂>石の下という順に生息数が多く、メガイアワビは亀裂>石の下>露天>棚>洞穴という順に生息数が多くなる。アワビ類は夜行性の生物であり、摂餌、ほふく、呼吸などの活動は夜間に行う。

アワビ類は大型褐藻を主な主食とし、アラメ、カジメ、アントクメ属褐藻などを食べて成長する。（川本 1967）アラメは岩手県南部の広田湾から四国南岸を除き瀬戸内海を含む太平洋全域、九州南端から西岸を経て日本海では島根県と鳥取県の境界あたりまで分布している。カジメは千葉県から九州東部までの太平洋沿岸と九州北部に分布する。徳島県の南方系アワビの漁獲量が多い水域では水深 0~5m まで直径 1m 以上の転石や岩盤にアラメが繁茂し、水深 5~10m にはアラメとカジメが混在し、水深が増すにつれてカジメが増加する。水深 10m 以上になるとカジメのみが分布することとなる。

### 第二節 経済活動としてのアワビ漁

アワビ類の漁業は経済活動として大きな役割を担っている。なかでもクロアワビは南方系

アワビの漁獲量の 50%強を占めており、単価が最も高く、最も重要な資源である。徳島県ではクロアワビが漁獲の 60%を占めている。

日本におけるアワビ類漁獲量は 1970 年に 6500 トンに達したが、その後減少傾向を示し、1999 年には 2100 トンにまで減少した。北方系アワビの漁獲量は 1970 年から 1990 年にかけて 3000 トンから 400 トンに減少した後、1990 年代には増加に転じ、1990 年には約 900 トンにまで回復した。これに対して南方系アワビは 1970～1980 年代には 3000～3500 トンの安定的な漁獲量を維持したが、1990 年代に激減し、1990 年には 1200 トンにまで減少した。このような漁獲量の減少にはアワビ類の資源管理に深く関係している。アワビ類は漁業管理をしないと簡単に資源が減ってしまう資源である。その理由として、「①寿命が長い、②幼生や稚貝のときに死亡率が非常に高い、③成長が遅い、④獲られていない資源は高齢貝が多く、資源量は大きい、⑤人間が潜れる深さに生息する、⑥単価が高い」(小島 2005:30)などが挙げられる。こうしたことから一時期は乱獲、また大規模な磯焼けなどにより資源が枯渇してしまう恐れもでてきた。それ以降、各地で様々な資源管理が行われ、貴重な資源であるアワビ類を守ってきている。

### 第三節 阿部のアワビ資源管理

3 章 2 節でも触れたように、阿部の人びとはアワビの資源管理に関して様々な取り組みを行っている。

“トーラン捕れば滅びる阿部の海士 部落の栄えだトーラン守れ”

阿部に伝わる言葉でこのようなものがある。トーランとは、殻長 9cm に満たないアワビのことを言う。徳島県漁業調整規則にはアワビの採捕制限が定められており、9cm 未満の貝の漁獲を禁じている。アワビの資源管理が行われる以前の明治期には、すでにアワビは重要な現金収入源だった資本としていたが、だがそれだけでは阿部の漁師全員が食べていくためには不十分であったため、多くの青年が遠洋漁業に従事した。この遠洋漁業も昭和 30 年までは豊漁であったが、その後の海難事故や不漁により中止に追い込まれた。昭和 35 年には県道の開通により稚貝の販売が容易になったことや、大規模な磯焼けなどに見舞われアワビの乱獲に陥ることとなった。そこで昭和 37 年 2 月の通常総会で“当年度より抜本的保護対策を講じる”と決議され、以下の 6 項目の決定を行った。

1. アラメの採取禁止：アラメはアワビの飼料であることから採取禁止となる。
2. 投石の推進：アワビの住み場作りとして投石を推進。25 年間継続され、昭和 50 年に中止される。
3. タコ・ウニの採捕奨励：タコがアワビを食害するので、タコの採捕を奨励。タコは市価の 3 倍の価格で買い上げる。
4. 磯建網・イサリによるアワビ採取の禁止：網にかかったアワビはその場で放し、イサリは禁止。
5. 操業期間、時間の短縮：昭和 36 年までは 5 月下旬から 6 月上旬に解禁、9 月 24 日まで操業（操業時間は朝 6 時から夕方まで）だったのが、操業期間 6 月 15 日～9 月 24 日となり、操業時間は午前 9 時～午後 3 時までとなる。さらに、昭和 55 年からは操業期間が 7 月 1 日～9 月 24 日に短縮される。現在は、6 月中旬の大潮のころに解禁、9 月下旬の祭りの前々日ごろまで操業している。操業時間は午前

10 時～午後 1 時までである。(大潮の時は午前 11 時～午後 1 時までの 2 時間。)

6. 漁業監視：密漁防止のため、昼夜にわたって漁場を監視する。現在では監視船を出している。

(小島博・山中幸夫 1983)

阿部の人びとは、以上の規則を定め、アワビの資源管理を行っている。また、アワビの餌となる大規模な藻場の設置を検討していたり、管轄海域内に禁漁区を作ったりとアワビの資源管理には余念がない。また、県条例では、クロアワビは 9 センチ、トコブシ 3 センチ以下の個体は出荷できないが、阿部はこの基準をクロアワビでは 9.5 センチ、メガイアワビでは 11 センチ、トコブシで 4 センチと独自に規定している。このように厳しいアワビの資源管理を実施している漁協は県内では阿部だけである。

## 第五章 アワビ漁の特徴

本章では阿部で行われているアワビ漁の特徴について説明する。第一節ではアワビ漁の概況について触れる。第二節からは漁法・漁具、出漁日数、漁獲物・量・高、漁場の認識利用、水揚げの場についてそれぞれ各節で説明していく。

### 第一節 阿部のアワビ漁

#### (1)アワビ漁の概況

アワビ漁は 6 月の中旬ごろの「口開け」という日から秋祭りの始まる 9 月下旬ごろまで操業されている。口開けは主に潮位に関係して決定されている。今年 (2013) のくちあけは 6 月 19 日を予定していた (天候の都合により延期) が、2013 年 6 月の推算潮位 (気象庁発表) を見てみると以下の図 4 の通りとなる。

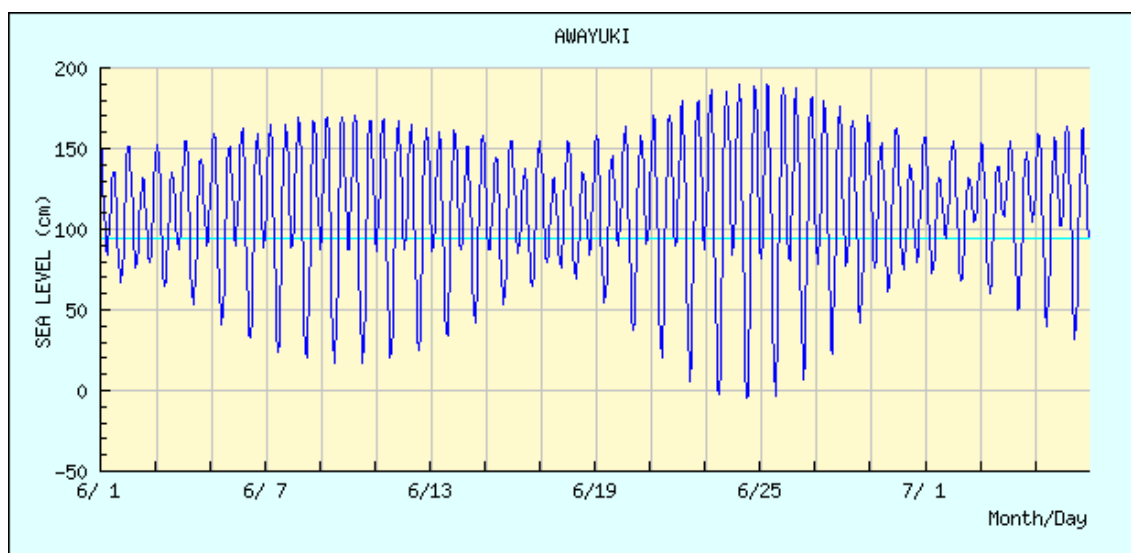


図 4 (気象庁 HP より)

<http://www.data.kishou.go.jp/kaiyou/db/tide/suisan/suisan.php>

ちょうど、6 月 19 日あたりで潮位は低くなっている。阿部漁協では海上保安協会徳島支部

が発行する「海の暦」にある「潮汐表」を参考に、毎年この時期の若潮前後にくちあけをおこなっている。なぜなら波の高さや風の強さ、天候などに左右されて必ずしもこの日に口開けできるとは限らない。よって、多少口開けの日が後にずれてもいよいよ徐々に大潮に向かっていく若潮を選ぶという。一番漁に適している潮の状態が一番潮の引く大潮の日である。しかし一番状態の良い日に口開けを設定してしまうと天候の都合で後にずれてしまうと潮の引かない日が口開けとなってしまう。こうしたことから、できるだけ大潮に近い日程を選ぶのであるが、それが若潮の日なのである。

操業時間に関しても、潮や日和の関係で変動があり、基本的には 10:00-13:00 の 3 時間であるが、日によって 11:30-14:30 になったり 11:00-14:00 になったりと可変的である。しかし操業時間が可変的であるのは主に操業が始まったばかりの 6 月下旬~7 月下旬までであり、8 月に入りお盆を過ぎたあたりになると 10:00-13:00 と安定している。その理由として、お盆を過ぎる頃から、海人漁のピークが過ぎアワビの水揚げ量が不安定になってくるため、基本的に時間を変更することなく操業する。

海人はこの潮の満ち引きに関して敏感であり、潮がよく引く大潮の日には多くの人が出漁する。(図 6)

アワビ漁に出る人数は口開けの日が最も多いと言われており、6 月 23 日で 104 人である(漁業伝票より筆者が計算)。男女比・年齢構成は以下の図 5 の通りであり、男性が少し多い。年齢構成を見てみるとやはり 50 代~70 代が多く、海人に関して高齢化が進んでいる。

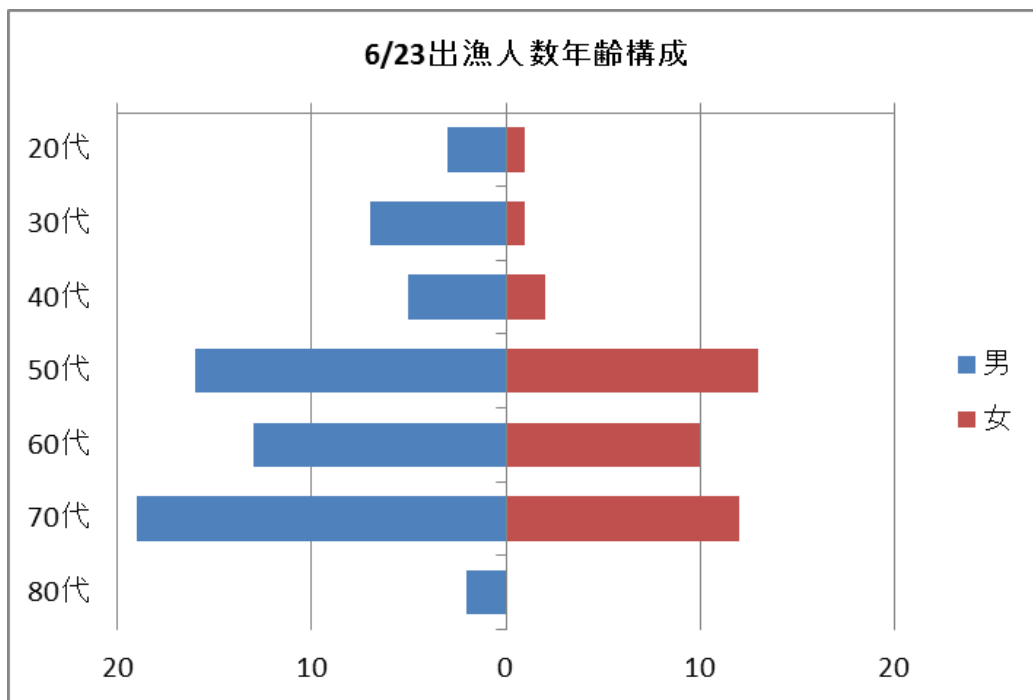


図 5 6/23 出漁人数男女、年齢構成 (漁業伝票より計算)

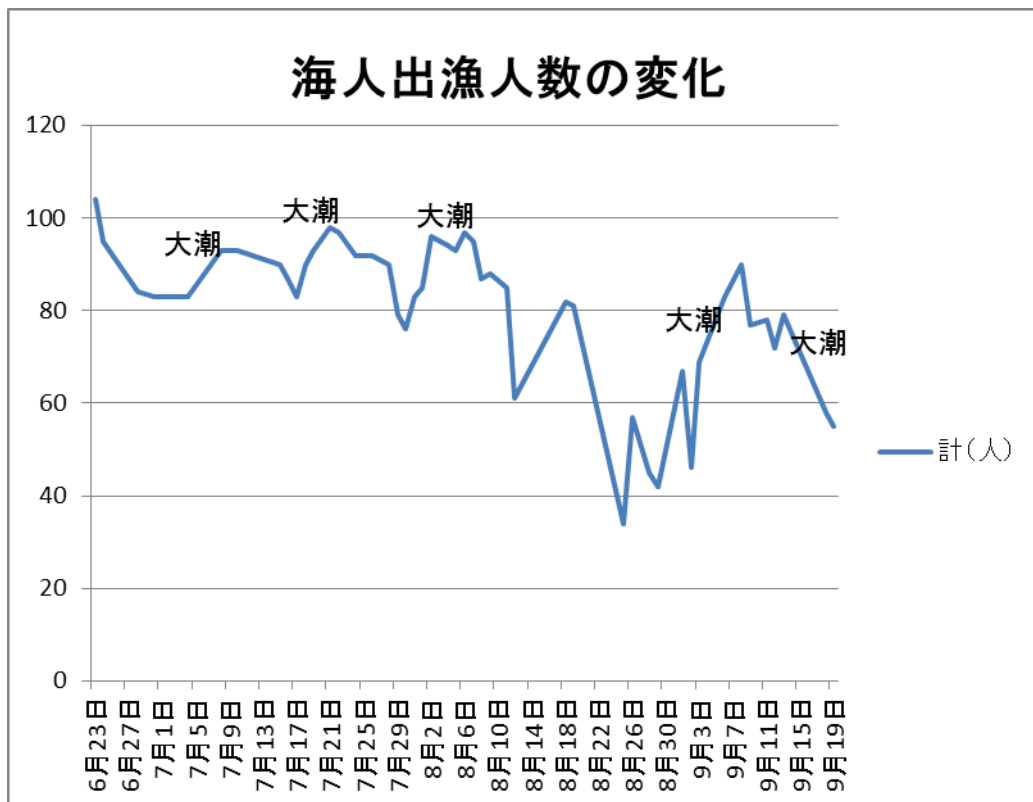


図 6 海人出漁人数の変化 (漁業伝票より作成)

次に今年の海人漁の漁獲量、漁獲高を見ていく。図 6 は平成 24 年度の阿部におけるアワビ漁の漁獲量、漁獲高である。アワビ漁の最盛期は口開け後 1 ヶ月ほどであり、8 月に入ると漁獲量が一気に落ち込む。お盆を過ぎるとさらに落ち込んでくる。アワビは回遊魚のように短期間に外からやってくるような資源ではなく、地先に生息する生物のため、操業を続けると生息数が減る。したがって 8 月下旬から 9 月になると漁獲量が減少するのは当然のことである。しかし、9 月初旬に入ってから、わずかではあるが再び漁獲量が上がっている。なぜだろうか。表 13 をみると漁獲量の上がっている 9 月初旬まで、お盆期間中の比較的長い間休漁、8 月末～9 月初旬の天候不順による休漁がみられる。この休漁が続くというのが海人たちの意欲に関係してくるのである。それは 9 月初旬に調査地でお話を伺っていると「明日は久しぶりにカツギに出れるわ」などうきうきした表情で話す人に出会った。阿部の人々は海人漁に出ることを「カツギに行く」と言う。長い間休漁が続くと阿部の海人たちは「早くカツギに行きたい」を言わんばかりにうずうずしているのである。夏の間は海に行かないとやる事が無く、早く海に出て「カツギ」たいのである。このため、9 月の天候不順などで休漁が多く、久しぶりの「カツギ」となれば多くの人が出漁して漁獲量が上がっていくのだと考えられる。

	日	月	火	水	木	金	土
6月							1
	2	3	4	5	6	7	8
	9	10	11	12	13	14	15
	16	17	18	19	20	21	22
	23 口開け)	24	25	26	27	28	29
	30						
7月		1	2	3	4	5	6
	7	8	9	10	11	12	13
	14	15	16	17	18	19	20
	21	22	23	24	25	26	27
	28	29	30	31			
8月					1	2	3
	4	5	6	7	8	9	10
	11	12	13	14	15	16	17
	18	19	20	21	22	23	24
	25	26	27	28	29	30	31
9月	1	2	3	4 台風17号)	5 台風17号)	6	7
	8	9	10	11	12	13	14
	15 (台風18号)	16	17	18	19 口止め)	20	21
	22	23	24	25	26	27	28
	29	30					

表 13 平成 24 年度阿部の海人漁操業カレンダー（色塗りの日が操業）（漁協資料より筆者が作成）

## (2) アワビ漁のパターン

アワビ漁には二つのパターンがある。一つは船に乗って沖まで行きそこで潜水し漁を行う方法でもう一つは歩いて磯まで行って比較的浅い水深で行う方法である。後者をここではオカから行く海人ということで「オカアマ」と表記する。前者は船を持っており比較的沖に出ることが出来ることから、水深が深いところで採集活動を行う。それに対しオカアマは背の立つところで漁を行う。船を持っていない人が必然的にオカアマになるのかというとそうではない。知り合いの船に乗って沖に出る人もいるからである。ほとんどの海人が船を所有しているので阿部の夏の海には船がたくさん停泊している。船で行く海人の中でも人によって浅いところを好む人と深いところを好む人に分かれる。浅いところを好む人は狭い岩間に潜り込みアワビを採集するため技術を要するという。深いところでは比較的発見しやすいところにアワビが生息しているため技術というよりは体力を要すると言えよう。この二つのパターンを次節から詳しくみていくこととする。

## 第二節 漁法・漁具

船から行く海人とオカアマの違いはその漁法である。船から行く海人は船で陸から 5～10m 時にはもっと遠くの沖へ繰り出し、水深 10m ほどのところで潜水し漁を行う。それに対してオカアマは陸から磯に繰り出し、背の立つところで漁を行う。船から行く海人と

オカアマの潜水時間を比べると表 14 のようになる。

船から行く海人		オカアマ	
J・Hさんの潜水時間		H・Yさんの潜水時間	
時間	秒)	時間	秒)
46		6	
51		1	インターバル
50		6	
56		1	インターバル
51		11	
56			
50			
46			
65			
47			
43			
42			
49			
45			
36			
36			
30			
40			
40			
59	場所を少し変更		
54			
50			
*約40秒のインターバルをはさむ			

表 14 海人の潜水時間

船から行く海人は潜水し約 10 秒で海底にたどり着き、その後約 20 秒海底の岩場を探索する。その後約 10 秒で海面まで浮上し、約 40 秒のインターバルを取る。その作業を何度か繰り返しその岩場に漁獲物がないと踏むと海面を泳いで移動し再び違う岩場を探索し始める。その作業を 2 時間半繰り返す。それに対しオカアマは潜水せず水面に顔を付けて適当な岩を探す。がいそうな岩を見つけるとその岩をひっくり返して岩の裏に付いているトコブシなどを採集する。トコブシを主な漁獲物とするオカアマはその作業を繰り返していく。アワビを主な漁獲物とするオカアマ（少数派ではあるが）は磯から少し深いところまで泳いで行き、そこで潜水して海底の岩場を探索する。



写真1 海底を探索する海人





写真2 岩をひっくり返すオカアマ

こうした漁法の違いから漁具にも違いがみられる。船から行く海人はウェットスーツを着用し腰に錘を装着する。さらに足ひれ、ゴーグル、手袋を着用する。またタルと呼ばれる浮のようなものを海面に浮かべる。海面を移動する際にそれに掴まり移動したり、採集したものをタルの下についている網に入れる。タルには流されないように錘が紐で繋がれており、移動する際にはその錘を持ち上げて移動する。手にはノミと呼ばれるアワビを岩からはがすときに用いるものを持つ。オカアマは同じくウェットスーツを着用するが潜水することがないため錘は装着しないか、もしくは軽いものを装着する。足ひれも水を掻いて潜る必要が無いため着用する人はほとんどいない。タルも使用する人とならない人がおり、使用しても錘をつなぐ紐が比較的短いものを使用している人がいたり、タルの横に小さなタルを付けて浅瀬でも対応できるようにしている。採集したものをすぐに入れられるように腰に小さな網を装着している人もいたりもする。

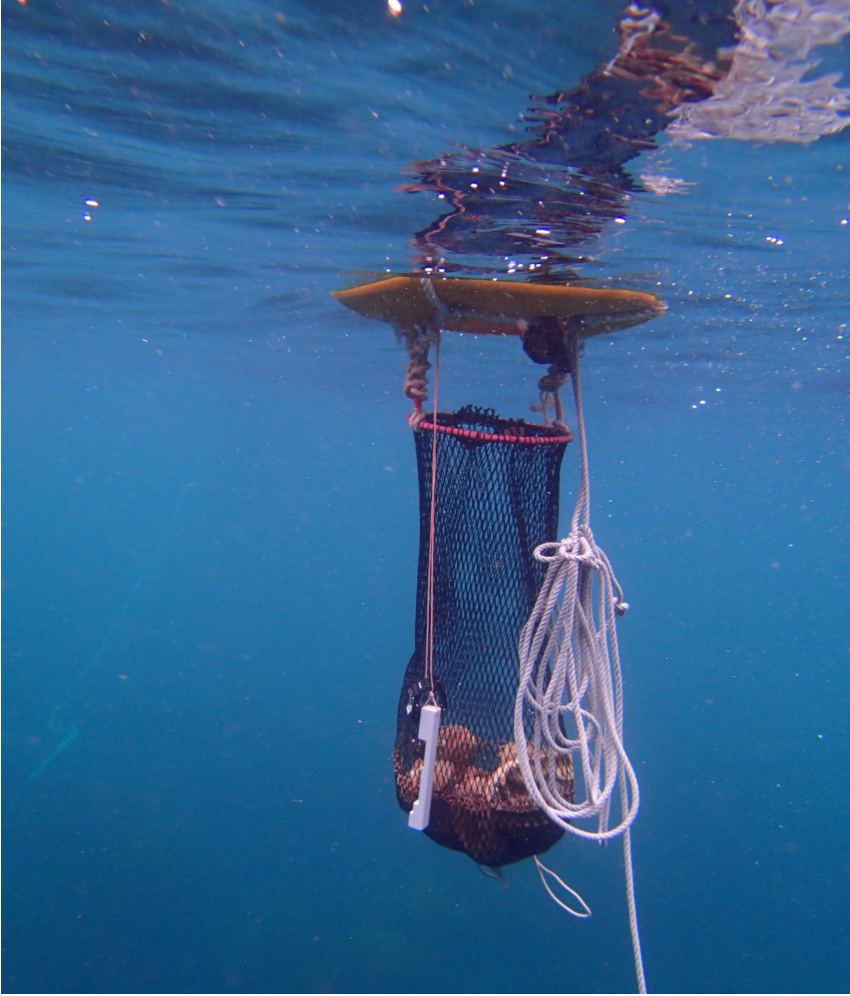


写真3 タルと呼ばれる浮のようなもの



写真4 タルの横に付けられた小さなタル（赤いタル）

第三節 出漁日数

船から行く海人					
	出漁日数	漁獲物	漁獲量（日）	漁獲量	漁獲高
T・Sさん 82・男)	35日	アワビ	約3kg	約100kg	約50万
H・Mさん 81・男)	50日	アワビ	約1~10kg	約140kg	約70万
M・Kさん 67・男)	40日	アワビ	約3kg	約120kg	約60万
T・Kさん 69・男)	40日	アワビ	約10kg	約400kg	約200万
オカアマ					
H・Yさん 61・男)	20日	トコブシ	約2-3kg	約50kg	約10万
T・Yさん 56・男)	10日	アワビ・トコブシ	約4-6kg	約50kg	約35万
M・Nさん 60・女)	20日	トコブシ・ウニ	約2-3kg	約50kg	約10万
S・Mさん 65・女)	30日	トコブシ・ウニ	約2-3kg	約75kg	約15万
E・Yさん 64・女)	20日	トコブシ・ウニ	約2-3kg	約50kg	約10万
S・Hさん 77・女)	例年約50日	アワビ・トコブシ	約3kg	約60kg	約30万

表 15 船から行く海人とオカアマの出漁日数、漁獲物、量、高

阿部のアワビ漁は今年（2013年）全47日操業している。

船から行く海人に出漁日数の話を聞くと皆口をそろえて「だいたい口が空いとる日はでとるな」と言い、オカアマに聞くと「潮が引く日しかいかんな」と言う。

この言葉に代表するように船から行く海人の出漁日数は40日程度の人が多く、解禁されている日ならほとんど行く人が多い。これに対してオカアマは20日前後の人が多く、船から行く海人に対して比較的少ない。この出漁日数の差はオカアマの「オカから行く」という点と「比較的背の立つところで取る」という点に由来している。オカアマは潮があま

り引かない時や海の状況が悪い時には出漁しない。潮が引かないと磯が現れず遠くまで漁場を広げることが出来ないからである。筆者が調査を行っているときにも「明日は潮が引かんけんいかん」などとぼやく海人に出会った。次の日は良く晴れ、漁に出るのには最高の日よりなのではないかと感じたが陸に海士の姿はそれほど多くは見られなかった。オカアマにとって「潮が引く」というのは船から行く海人よりシビアに左右する条件なのである。それに対して、船で行く海人は潮が引かない時でも少し沖まで行き潜水して漁を行うため、出漁日数が多くなる。もちろん船から行く海人にとって「潮が引く」というのは重要な条件ではあるが、オカアマほど大きな要因ではないのではないかと考えられる。

#### 第四節 漁獲物・漁獲量・漁獲高

船から行く海人とオカアマの漁獲物の違いについて触れるにおいて、それぞれが対象とする漁獲物の生態についてとらえておく必要がある。それは船から行く海人とオカアマでは専門とする漁場の水深が違い、そこに生息する生物も違うからである。阿部のアワビ漁ではクロアワビ、メガイアワビ、マダカアワビ、トコブシが漁獲対象となっている。トコブシは浅い潮間帯を中心に分布し、ついでクロアワビが水深 10m 以浅を中心に分布する。メガイアワビ、マダカアワビはより深い水域に分布する傾向がある。(川本 1967) オカアマの専門と漁場は「比較的背の立つところ」であることからトコブシが主な漁獲物となる。もちろん時にはクロアワビを採集する場合もあるが、船から行く海人に対して少ない。船から行く海人は水深 10m ほどの漁場を専門とすることからクロアワビ、メガイアワビ、マダカアワビを多く採集する。また、船から行く海人がよくアワビを獲るのには船にかかるコストに由来する。船を動かす燃料はガソリンであるが、それにオイルを混ぜているものを使用する。阿部に多い小型船の船外機では 100 缶を使用する。1 リットルあたり約 169 円であり、一度 10 リットル缶を購入すると沿岸における漁業なら 5、6 回は漁に出られるという。

こうしたコストがある船から行く海人に対してオカアマのコストはゼロである。オカアマは別に獲れなくても利益がマイナスになることはないのである。一方船から行く海人は僅かではあるが船を持つことにより利益を得るためには高級なアワビを採集していくのだと考えられる。

漁獲量を見てみるとオカアマに関してそれほど個人差はみられないが、船から行く海人に関しては差が見られる。漁協に水揚げする光景を見ていても船から行く海人の手に持つアワビの量はそれぞれ個人差があったのが印象的である。また、一日の漁獲量も船から行く海人は不安定である。アワビの漁獲量のインタビューを行った際「ほりゃ 1kg のときもあれば 10kg のときもある」といったように日によってその漁獲量は様々である。そのため、船から行く海人が漁協に水揚げに来た際には「今日はよーとれた」「今日は全然あかんかった」と一喜一憂であり、たくさん採集してきた海人をみると周りの海人からも「〇〇さん今日はよー取っとるで」という言葉がかけられ、どこそこが取れた、どこそこはダメだったという話で盛り上がっていた。

#### 第五節 漁場の認識・利用

船から行く海人とオカアマでは前述の通り専門とする漁場が異なってくる。では具体的に

はどのように異なっているのか。また、阿部には各磯や岩に名称が付いており、その名前を使って人々は場所を認識している。図は各場所の名称を記入した地図である。漁師は海での場所を指す際、この地図上にあるような名称で説明する。また、漁師たちは海上の位置や地形だけではなく、海底の地形までも把握し、認識している。漁師たちの間では、「〇〇の底にある岩にアワビがたくさんいた」、「あーあそこか、あんなところにいたのか」などという会話がしばしばなされる。こうした海上や海底の細かい地形的特徴の認知は三田(2004)の糸満漁師の例にも見られる。糸満の漁師は「海を読む」という言葉でこうした漁場認識を表す。海図に書かれた情報に加えその誤差や書かれていない情報は自分で探っていく。さらに魚群探知機の導入などにより海底地形をより詳しく把握できるようになった。そうした蓄積された海底に関する知識や経験をもとに漁の実践を行っている。阿部で行われているのは潜水漁という体一つで水中に潜ってする漁であるため、海底地形を実際に目で見て把握することができる。また、こうして潜水漁で培った海底地形の把握は他の漁法にも取り入れられる。例えばイセエビ網漁をする際、網を入れるポイントは岩の近くに網を刺しこむことである。海底にある岩の場所が分からなければイセエビは獲れないし、また岩に網が絡まって網を駄目にしてしまうこともある。阿部でもこうした知識や経験の中で海上・海底の地形的特徴を認知し、細かく区別している。そしてその特徴を活かした漁を行っているといえよう。

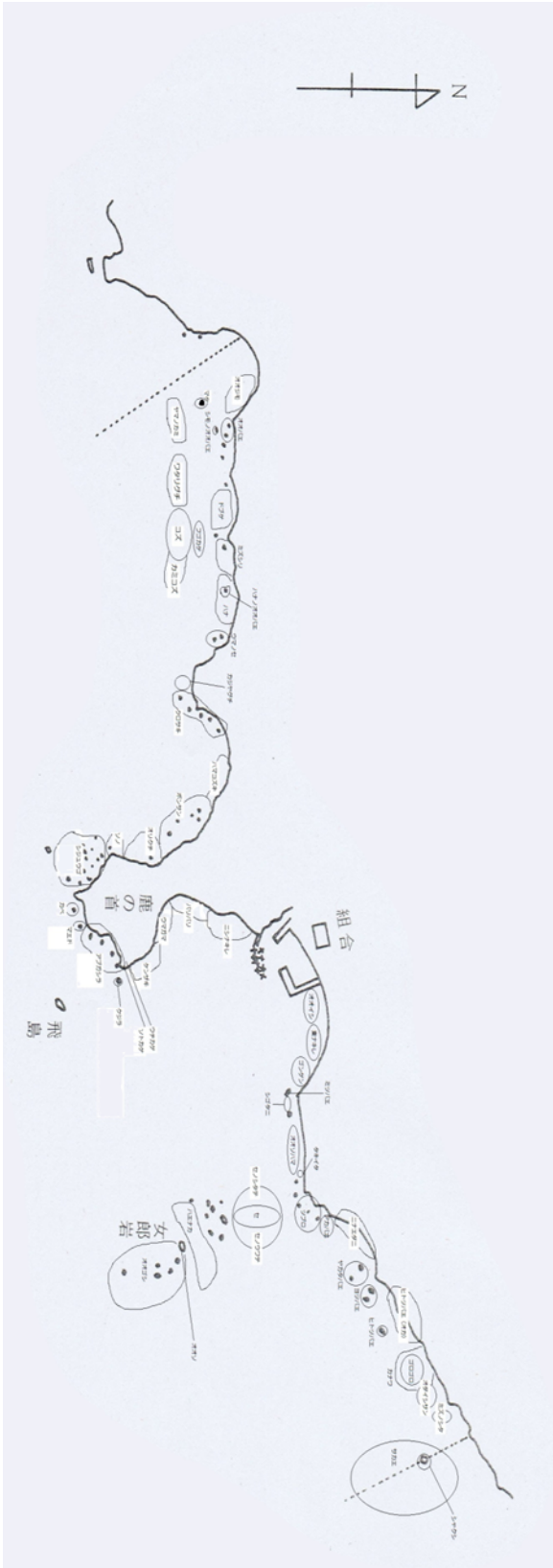


図7 阿部における磯の名称

9/1 (10:00-13:00)

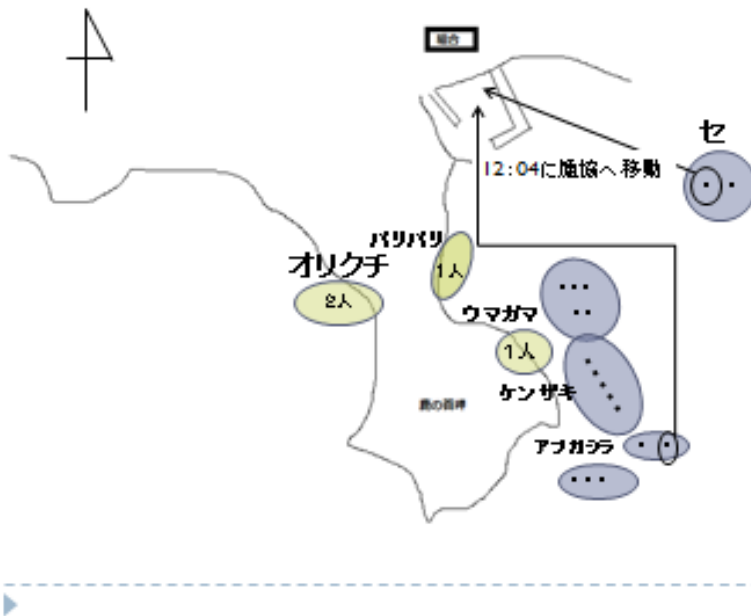


図8 9/1 海人の空間的配置

これは 9/1 (操業時間 10:00-13:00) の海人の空間的配置である。青色で囲ったのが船から行く海人であり黄色がオカアマである。船から行く海人は「・」で示し、オカアマは人数で示した。オリクチやウマガマ、バリバリなどは阿部で使われている磯の名称である。阿部ではそれぞれの磯に名前が付けられておりその名称で磯の場所を認識している。この日は船から行く海人がウマガマ・ケンザキに集中してみられた。この日はある海人曰く「波が高くて日和が悪い」日であったらしく、みな比較的波が高くない湾の内側辺りに集中したといえる。オカアマは基本的にバリバリ、ウマガマ、オリクチあたりまでしか歩いていくことができないのでそこに集中している。

9/6 (10:00-13:00)



図9 9/6 海人の空間的配置

これは 9/6 (操業時間 10:00-13:00) の海人の空間的配置である。この日は東からの風が非常に強く、鹿の首岬の東側には船はみられなかった。ウマガマあたりで座っていた海人がいたので話を聞いてみると「今日は風がつよいけんな、みんなあっち側 (オリクチ側) に行くわ。」と言っていた。鹿の首岬の西側へ出ると東からの風の影響はほとんどなく、波は穏やかであった。そのためオリクチあたりにはオカアマの荷物がたくさん置かれ、少し沖を見てみても船がたくさん停泊しているのが見てとれた。

このように漁場の選択を決定づける一つの要因は風の影響や海の状況である。海人はその日の海の状況を考えて時には漁場を変更しながら利用しているのである。



9/8 (10:00-13:00)

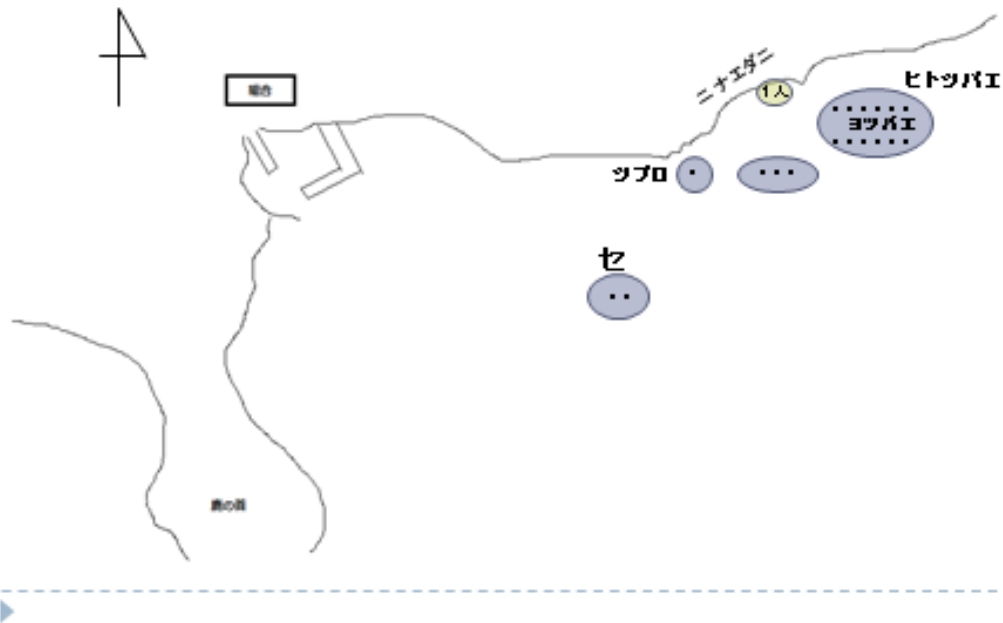


図10 9/8 海人の空間的配置

これは 9/8 (操業時間 10:00-13:00) の海人の空間的配置である。この日は筆者が阿部の東の漁場に足を運び観察し記録した。この東の漁場には多くの船が停泊しており、特にヨツバエと呼ばれる磯の辺りには 2、3m 間隔で船が密集して停泊していた。このあたりはクロアワビが多く取れる「一級の漁場」であり多くの人がクロアワビを採りに来るのだという。

以上のように海人が漁場を選択する際に重要になってくるファクターは風や波などの海の状況と資源の分布である。阿部の漁師は漁がある日朝方から港に立ち寄り風の状態や波の状態など海を見に来る。そうした海の状況を考えて最初に行く漁場を決めるが、いざ漁場に出るとその場所にアワビがいなかったり、思ったよりも波が高くなったりとその時の状況に合わせて選択していく。また、オカアマと船で行く海人では漁場利用に違いがある。オカアマは歩いていける漁場が限られており、一つの漁場に海人が集中しやすい。それに対して船で行く海人は漁区を自由に移動し漁場を選択するため散らばって分布する傾向にある。

#### 第六節 水揚げの場所としての漁協

阿部ではアワビ漁が終了する時間になると大勢の人が漁協に獲ったアワビやトコブシ、サザエなどを水揚げしに来る。このことから水揚げの場とは各海人の漁獲が一目にして分かる場であり、いろんな海人の情報が飛び交う。漁協では職員がたくさんのアワビを前に

アワビの選別を行っている。アワビの選別とは、傷が付いて売り物にならないアワビのチェックや規定サイズに満たないアワビを獲っていないかを選別する作業のことである。この時に職員は海から帰ってきた海人たちと様々な会話をする。「おお、よーけととんで」などと職員が声をかければ、誇らしい顔つきで「ほら今日はよーけおったわ」と海人たちは返す。また、職員だけではなく周りの海人たちも漁獲が多い海人を見つけると「今日はよーけととるな」と声をかけたりする。そしてその時にどこで漁を行ったのか、どこが良く獲れる場所なのか情報交換がなされる。たとえば周りの海人に「今日は〇〇の下の岩がサラやったわ」という海人がいた。「サラ」とはだれも獲っていない状態のことを指し、今まで誰も行かなかった場所を見つけて嬉しそうに語っていた。また、「〇〇にはもう何もおらん」と獲りつくしてしまった場所の情報も交換されていく。場所の情報だけではなく、自分がアワビをどのようにして獲ったのかという一種の武勇伝のような情報も海人たちの間で語られる。

## 第六章 海人の生活史

この章では阿部の海人がどのような経歴を辿って現在に至ったのかライフヒストリーを使って明らかにしていく。また U ターンしてきた海人にはいくつかのパターンが見られ、第一節では中途退職 U ターンの事例を、第二節では定年退職後に U ターンしてきた海人の事例を、第三節では二拠点居住の海人の事例を取り上げて検討していく。

### 第一節 中途退職 U ターン海人

#### Y・H さんの例（船から行く海人）

Y・H さんは現在 44 歳、男性であり、私が阿部に行くと必ずと言っていいほど会う人の一人である。時間のある時には漁協に顔を出して漁協の職員とその日の漁獲の話をしたり、世間話をしたりしている。Y・H さんは大阪で生まれ、2 歳の時に阿部に来た。その後高校卒業まで阿部ですごし、高校卒業後は 5 年間徳島市内のガラス屋で営業をしていた。24 歳の時に阿部に戻り、伊座利にある御水荘という宿泊施設で 1 年間勤めた。その後電力会社の下請けに 1 年間勤務し 26 歳の時に漁師を始めた。Y・H さんの両親も漁師であり、漁を行う設備や知識などはある程度そろっていたと考えられる。

Y・H 44 歳(男)					
1969年	大阪で生まれる				
1971年	阿部に来る				
1972～1986	高校卒業まで阿部で過ごす				
1987～1992	高校卒業後 5年間徳島市内のガラス屋に勤める。				
1993年～	24歳の時に阿部に戻ってくる。				
	御水荘で1年間勤め、その後、電力会社の下請けで1年間勤める。				
1995年～	26歳のとき、漁師を始める。				

表 16 Y・H さんの年表

#### S・C さんの例（船から行く海人）

S・C さんは現在 75 歳、男性である。阿部で生まれ、中学卒業まで阿部で過ごした。その

後和歌山県的那智勝浦で4年間マグロ漁船に乗っていた。その後2年間和歌山県の田辺のマグロ漁船に乗り、その後一度阿部に戻ってきた。阿部に少しだけ滞在した後神奈川県の三崎で5年間マグロ漁船に乗り込み40歳の時に阿部に戻り現在に至る。

<b>S・C (75・男)</b>					
1938年	阿部で生まれる。				
～1953	中学卒業まで阿部で過ごす。				
1954～1958	和歌山県的那智勝浦でマグロ漁船の出稼ぎ				
1958～1960	和歌山県田辺でマグロ漁船に従事				
	その後、少し阿部に戻る				
～1977	神奈川県 <small>の</small> マグロ漁船に従事				
1978～	40歳の時、阿部に戻ってくる。				

表 17 S・Cさんの年表

T・Sさんの例（船から行く海人）

T・Sさんは現在21歳の男性である。阿部で生まれ、阿部の小学校に通い中学校は由岐の中学校へ通った。高校は小松島の高校へ通い、いずれも阿部から通っている。高校卒業後は1年半警察官として警察署に勤め、その後は由岐の飲食店に1年間勤務していた。2012年の末に阿部で漁師を始めた。

<b>T・S (21・男)</b>					
1992年	阿部で生まれる				
	阿部の小学校、由岐の中学校、小松島 <small>の</small> 高校へ進学する。				
	いずれも阿部から通っていた。				
2010～2011	警察へ一年半勤める。				
	その後、一年は飲食店で働く。				
2012～	2012年末から漁師を始める。				

表 18 T・Sさんの年表

以上の3名はいずれも一度阿部の外で働き、定年を迎える前に阿部に戻ってきて漁師を始めている。親が漁師で船や網などある程度漁をする下地があり、帰ってきてすぐに漁を行える状態であることが特徴的である。これは中途退職の人たちは阿部に戻ってくる年齢が比較的若く親がまだ現役の漁師であることからすぐに漁を始められるのだと考えられる。こうしたことから中途退職Uターンの海人は船を持っている海人が多く、多くの技術や知識を習得することができる。また、アワビという限られた資源を採集する漁において新規参入者はあまり歓迎されない。さらに船から行くということはアワビ漁に本格的に参加することであり、新規参入者が船で漁場に繰り出すという行為は特に歓迎されることではない。「特に今は個人のなわばりなんか無い」と海人の人たちは言うが、そこにはなわばりと言わんばかりの「新規参入者への視線」のようなものが存在しているように思われる。筆者が調査をしているとある海人からアワビをいただくことが幾度かあった。そのアワビを漁協に持ち帰ると周りの海人からは「よーけもらったな、わいらより取っとるわ」「わいらも取りにいくよりもらいにいこかの」などと冗談と皮肉交じりの言葉をかけられたことがあった。その言葉からも誰かもわからない人が阿部の限りある資源を取っていくという行為には歓迎的ではないのである。しかし、親が現役の漁師であると新規参入者といっ

でも「〇〇の息子」という認識があり、むしろ親の漁師仲間などから歓迎されるのである。こうしたすんなり漁に入っていくやすい構造が出来ていることが中途退職Uターンの海人には多くのではないだろうか。

## 第二節 定年退職後 U ターンしてきた海人

### N・U さんの例（オカアマ）

N・U さんは現在 67 歳の男性である。阿部で生まれ、中学卒業まで阿部で過ごしていた。その後日和佐の高校へ進学するが中退する。それから N・U さん曰く「ぶらぶら」しており、その後大阪の印刷会社に 4、5 年勤める。その後は同じく大阪で潜水業に 20 年間従事する。潜水業は N・U さんの兄が従事しており、その手伝いとして勤めていたという。その後福井県の建設会社に勤める。建設会社でも海上班に所属しており、潜水業などを行っていた。福井県の建設会社で 60 歳になり定年を迎えるがその後も 2、3 年そこで働いていた。64 歳の時に阿部に戻ってきた。現在 N・U さんは姉と二人暮らしで高齢の姉のことが心配になって帰ってきたと話す。N・U さんは海人を今年から始めている。それも阿部にきて 3 年が経たないと海人漁をする資格が得られないからである。阿部ではまず 3 年間阿部に住みそれから漁協の役員会に審議がかけられ漁業権を得る仕組みになっている。よって阿部に来て 3 年目の今年から海人漁を行う権利を得たのである。N・U さんは船を所有しておらず、海人漁のスタイルは陸から歩いていくオカアマである。漁に行く際には親しい友人と行くことが多く、よく 2 人で漁に行く。

N・U (67・男)	
1946年	阿部で生まれる
～1961	中学卒業まで阿部で過ごす。
	その後日和佐の高校へ進学するが、中退。
1962～	大阪の印刷会社に4、5年間勤める
	大阪で潜水業に20年ほど従事する。
～2010	福井県の建設会社に勤める
2010～	定年後、阿部に戻ってくる。

表 19 N・U さんの年表

### E・Y さんの例（オカアマ）

E・Y さんは現在 64 歳の女性である。阿部で生まれ、中学までは阿部の学校に通っていた。高校は日和佐の高校に進学し、高校卒業後は由岐の役場に勤めていた。高校に通っているときも役場に勤めているときも阿部の自宅から通っており、基本的には阿部でずっと暮らしていた。56 歳で役場を退職し翌年の 57 歳から阿部で海人漁を始めた。役場に勤めているときにも年に 1 回か 2 回はアワビ漁に出ることがあったという。E・Y さんの海人漁のスタイルはオカアマである。現在 E・Y さんが一人暮らしである。子どもは 2 人おり、現在住んでいる家の隣に息子夫婦が住んでいる。E・Y さんの父親が阿部に住んでおり、ご飯を食べるときなどは一緒に食べたりしている。

E・Y (64・女)				
1949年	阿部で生まれる。			
～1964	中学まで阿部の学校に通う。			
～1967	高校は日和佐の高校へ進学する。			
1967～2005	高校卒業後、由岐の役場に勤める。			
2006～	56歳で退職し、57歳から海人を始める。			

表 20 E・Y さんの年表

以上の 2 名は定年退職（あるいはそれに近い歳まで働き退職）して阿部でアワビ漁を始めたひとたちである。なぜアワビ漁を始めたのですか？と聞くと彼らは「阿部におってもすることがない」と口ぐちに言う。「遊びみたいな程度よ」とも言い、海人漁に対してそれほど本格的に取り組んでいない様子も見てとれた。こうしたことから定年退職後 U ターン海人はオカアマによくみられる。定年退職後、阿部で過ごし夏になるとアワビ漁に出かけ、空いている時間には畑を管理し、余生をゆっくりと過ごしている。

### 第三節 二拠点居住の海人

定年退職後阿部に戻り移り住む人もいるが、定年退職後にまた違う形で阿部に戻ってくる人たちもいる。それが二拠点居住である。二拠点居住者とは阿部の家の他に仕事をしていた時に使っていた家を持ち、その二つの家を行き来しながら生活するスタイルである。二拠点居住者は阿部の家には 1 人、もしくは自分の兄弟姉妹などと住み、もう一つの家には自分の妻や子どもが住んでいるパターンが多い。

#### O・S さんの例（オカアマ）

O・S さんは現在 70 歳の男性である。阿部で生まれ、中学 2 年生まで阿部で過ごした。中学 3 年生になると親の転勤で徳島市内の中学校へ転校する。高校は徳島市内の高校へ通い、高校卒業後は市内の銀行へ勤めていた。25 歳で結婚し親元を離れて過ごし始める。60 歳で定年退職し阿部に戻ってくる。阿部に戻ってくるも、市内には家があり現在も市内と阿部とを行き来している二拠点居住者である。現在阿部には 1 人で住んでいる。O・S さんはオカアマであるが船は持っている。「なぜ船を持っているのに船からアワビ漁を行わないのか」という筆者の質問に「船で沖に行って漁をするようなズカズカと入り込んでいく行動はとりたくない」と答えていた。この発言には前述の「新規参入者への目線」のようなものが感じられ、定年退職後、遊び程度で漁をやっている人が船で沖に出るのは気が引けるといったような思いが感じられた。

O・S (70・男)				
1943年	阿部で生まれる			
～1958年	中学2年まで阿部で過ごす 中学3年の時に徳島市内へ転居する。			
～1961年	市内の高校へ通う。			
1961年～	徳島市内の銀行へ勤める			
1968年	結婚			
2003年	定年後、阿部に戻る。現在も徳島市内に家があり2拠点居住者。			

表 21 O・S さんの年表

N・K さんの例（船から行く海人）

N・K さんは現在 75 歳の男性である。阿部で生まれ、中学卒業までは阿部で過ごした。中学卒業後、和歌山県的那智勝浦でマグロ漁船漁に 2 年間従事し、その後福岡で 4 年間トロール船漁に従事していた。その後神奈川県の大磯で 6 年間マグロ漁船漁に従事し、28 歳の時に大阪で公務員になる。公務員を 29 年間勤め 60 歳で定年退職し阿部に戻ってきた。現在も大阪に家があり、阿部と大阪とを行き来する二拠点居住者である。一年のうち 10 か月は阿部におり、ほとんどの月日を阿部で過ごしている。現在奥さんの 2 人暮らしであり、息子が一人いる。お正月には息子夫婦と孫が大阪の家に帰ってくるらしく、楽しみだと語っていた。N・K さんは船を持っており、船で海人漁を行っている。定年後船を購入し、阿部で釣りなどを楽しんでいる。

N・K 75 男)	
1938年	阿部で生まれる。
～1953	中学卒業まで阿部で過ごす。
1954～1956	和歌山県那智勝浦でマグロ漁船に従事
1957～1961	福岡県のトロール船に従事
1962～1965	神奈川県のマグロ漁船に従事
1965～1994	大阪で公務員
1994～	定年後は阿部と大阪を行ったり来たりしている。 一年のうち、だいたい10か月ぐらいは阿部にいる。

表 22 N・K さんの年表

以上の 2 名は定年退職後、阿部に戻ってくるが、就職時代に使っていた家と阿部とを行ったり来たりしている。O・S さんは「まあ別荘のようなもん」という言葉で阿部の家を表現する。O・S さんが阿部に帰ってきたひとつのきっかけとしてこんな話をしてくれた。O・S さんが会社に勤めているときに妻の親戚の家に行くことがあったという。妻の実家は漁師の家であり、親戚に誘われて朝早くから小型船に乗り込み釣りに出かけた。ゆっくりとしたスピードで走る船に乗り、釣れるか釣れないか分からない魚をひたすら待ち続けていた。そこで「毎日こんなことして生活しているのか」と O・S さんは思い、同時にこうした暮らしもいいかもしれないと思い、阿部の実家（当時は貸家であったが）を再び買い取り阿部に帰ることを決めたという。そして定年退職後は阿部に帰り、朝早くから釣りに出かけてはその日食べるおかずを採り、夏には海人漁をして、ゆっくりと生活を送っている。

定年退職後 U ターンしてきた海人にはオカアマが多いことが分かる。二拠点居住者である N・K さんは船から行く海人であるが、インタビューの際「ワシに海人漁のことは聞かんで、遊びでやりよるようなもんやけん」と言いながらもインタビューに応じてくれた。定年退職後に阿部に戻ってきた人たちはいわば一度阿部から離れて生活していた人たちである。そのような人たちの多くがオカアマであるのは投資が少なく船から行く海人ほど高度な技術を要せず手軽に参入できる漁法であるからではないだろうか。

## 第七章 分析と考察

第二章では阿部地区、伊座利地区、西由岐地区の比較し、それぞれの地区の特徴を明らかにしてきた。人口が多く由岐の中心的機能を有する西由岐地区、人口あたりの漁業就業者数が最も多く、漁業に特化した阿部地区、人口が最も少ないが I ターン政策などが功を奏し、徐々に人口増加や児童数の増加などをみせる伊座利地区、という特徴がみられた。そこで、最も漁業に特化した地区である阿部地区を対象地区とし、阿部における漁業を第三章では詳しくみていくこととした。

第三章では阿部地区を生業活動、歴史、現在の阿部の漁業という点から説明してきた。阿部の主要な産業は漁業であり、その中でも主な漁獲物はアワビ類であった。また、アワビ類を漁獲する潜水漁は藩政期から阿部のメジャー・サブシステムであり、一時期漁法の主流が遠洋漁業や大敷網へと移行するものの、その背後で絶えず続く生業であった。現在の阿部における漁業では、漁協組織に注目し、過疎高齢化に悩む地域である阿部であるが、漁協の組合員数は正・準組合員を合わせて 135 名とかなりの人数であり、さらに 40 代、60 代の新規加入者から新たな漁師のリクルートも若干ではあるがなされてることを明らかにした。

第四章では第三章で阿部のメジャー・サブシステムがアワビ漁であることが明らかになったため、アワビの生態やアワビの経済的価値に触れ、阿部で行われてきた資源管理について説明してきた。アワビは移動性の小さい生物であり、回遊魚のようにやってくる生物ではない。そのことからアワビ漁というのは地先の限られた資源を採集していく漁である。さらにアワビは高価なものであり、乱獲による資源枯渇を招きやすい。実際に阿部でも乱獲による資源枯渇の危機に直面したため、現在にいたるまで、様々な規制を敷き資源管理を行っている。

第五章では阿部のアワビ漁の特徴を共時的に描いてきた。まず、アワビ漁のパターンには船から行く海人とオカアマとの 2 パターンあり、それぞれ漁法や漁具、出漁日数、漁獲物・量、漁場の空間的配置などに差異がみられた。漁法では船から行く海人が比較的深いところへ潜水して採集するのに対し、オカアマは背の立つところで漁を行う。出漁日数も船から行く海人に関してはそれほど天候や潮の状況に左右されることなく出漁するが、オカアマは大潮のような潮が良く引く日や海の状況が良い日しか出漁しない。漁獲物も船から行く海人とオカアマでは違い、船から行く海人は主にアワビを採集するが、オカアマはトコブシを主に採集する。この違いはアワビ・トコブシの生態的な分布に起因するがそれだけではなく、船から行く海人のコストという点にも起因している。船から行く海人は船の燃料代や船の管理費などコストがかかるためより高価なアワビを採集するのである。このことは船から行く海人の漁場選択にもつながっており、船から行く海人の漁場選択のファクターとして資源の分布が挙げられ、資源の豊富な「一級の漁場」に集中する傾向がみられた。その他に漁場選択の際には風や波などが重要視される。また、オカアマは歩いて行ける漁場に漁場が限定されているため、一カ所に集中する傾向がみられた。水揚げの場としての漁協では船から行く海人とオカアマが一斉に会す場であり、お互いの漁獲量が可視化される場であった。また、海人同士の情報交換の場でもあり、様々な情報が水揚げの場では共有されていた。

第六章では阿部の人たちがどのような経過を辿って海人になっていったのかをライフヒストリーを用いて説明した。阿部の海人のほとんどは一度外で勤めて帰ってきた U ターン者であった。その中でも船から行く海人に多いのは中途退職した後阿部に帰ってきた人たちであり、親が現役の漁師であったりと漁業をする下地が整っていた。それに対し、オカアマに多い定年退職後 U ターンしてきた者は本格的な漁ではなく「遊び」や「余暇」としての要素が強く見られた。また、定年退職後に U ターンしてきた者の中には都市一田舎間の二拠点居住者もあり、別荘として阿部の家を使いながらアワビ漁を行う者もいた。

これまで、阿部のアワビ漁についてみてきたが船から行く海人やオカアマに限らずアワビ漁は自ら海に潜り自分の手で採集するといった原始的な漁法である。筆者自身も船から行く海人、またオカアマに同行し同じように潜ったりしてみたがかなりの体力を使う。そして熟練の技術と知識がないと獲物は採集するどころか見つけることすらできずただただ体力ばかりが奪われていく体験をした。こうした過酷なアワビ漁であるが彼らを海へと駆り立てるものは一体なんなのか、アワビ漁の特徴に焦点を当ててみるとそこには「楽しみ」の要素があるのではないだろうか。一つ目は船から行く海人によく見られた個人の漁獲量の差である。筆者が漁協でアワビ漁の水揚げの手伝いをしていた時、手に多くのアワビを抱えて漁協に帰ってくる人がいれば周りのみんなはそれを目に「よーけ獲っとんで」と声をかけていたのが印象的であった。水揚げの場である漁協では個人の漁獲量が可視化され、みんなに分かる形で現れる。漁協では様々な情報交換が行われるだけでなく、各海人の漁獲量の差を明確にさせる。個人漁であるアワビ漁という特徴から考えて個人の技術や体力、知識などが明確に現れてくる漁である。個人差が現れてくると「多く取る人」（阿部ではオオアマと呼ばれる）と「あまり取れない人」（コアマと呼ばれる）というものが出現する。オオアマと呼ばれることはみんなから一目置かれることであり、そこでの社会的価値となる。煎本（1996）は海人漁での「活動の結果は知識や身体というそれぞれの個人の能力のみによって得られたものであり、このことが社会的価値になっていた」（煎本 1996:81）と述べており、オオアマと呼ばれることが阿部で生きる人びとたちの「威信」なのである。またオオアマを目指すということが海へ潜る原動力なのではないだろうか。また、自然を相手にするため、海の状態や資源の状態などによって日によっては多く採れたり、逆にほとんど採れない日があったりと漁獲量の不確定性がみられた。ある海人は「ほらよーけ採れる時は 10 キロとかとれたりするけど、あかんときは全然よ」と言っていた。漁協への水揚げの際にもたくさん取れた時の顔つきはほとんど獲れなかった時のそれとは違っていた。この漁獲の不確定性とそれに関わるある種の威信はギアーツ（1987）がバリ島における闘鶏の中に見出した「深い遊び」と似通ったものがあるのではないだろうか。バリ島の闘鶏が人々を深い遊びへ誘う大きな要素は「賭け」という要素であった。そしてこの「賭け」とは金銭という側面だけでなく、「尊敬、名誉、威厳、敬意など一言で言えばバリでは非常に意味の深い地位が賭けられている。」（ギアーツ 1987:418）そして、この地位とはあくまで象徴的なものであり、闘鶏の結果で実際に地位が変わることはない。阿部のアワビ漁でも個人差が現れ、日によっては漁獲量にバラつきがあるという不確定な賭けにも似た要素を持つ。その不確定性の中で「オオアマ」とよばれる海人たちの威信に関わる社会的価値が付与されていくこととなる。こうした要素が海人たちを「深い遊び」に



引き込んでいるのではないだろうか。

二つ目は漁場の利用方法にみられる楽しみである。船から行く海人は海の状態、良く取れる漁場など様々な要素の中で他の海人たちと暗黙の駆け引きを行い漁場を選択する。なぜなら「一級の漁場」に行くと競争率は高くなり、かと言って誰もいない漁場に行くというのは収穫が少なくなるかもしれないといったリスクを抱えながら漁場を選択しているからである。またオカアマの場合も争心を煽るような仕掛けがなされている。それはオカアマの専門とする漁場が限られていることである。歩いていける漁場にしかオカアマはいけないため、オカアマが漁を行う際にはひとつの漁場にオカアマが集中する。そのため、周りのオカアマの漁獲量が分かりやすく個人差が目に見える形で表れてくるのである。こうした差はオカアマたちの競争心を煽り、漁への意欲を掻き立てているのではないだろうか。菅（1998）は伝統的に続くサケ漁を例にそのサケ漁が存続する楽しみの要素として競争の楽しみを挙げている。そこでは他の漁仲間の漁獲数の多寡がすぐに分かるようになっており、そうしたことが競争を煽る仕掛けとなっており、漁師たちはより多くのサケを捕るために邁進する。しかし菅（1998）はこうした競争の楽しみの背後にある「つきあいの楽しみ」についても触れており、漁仲間の親和性を楽しみの要素として挙げている。オカアマにも同じようなことは見られる。オカアマの限られた漁場というのは競争心を煽るだけの装置だけではなく、同時に「人付き合い」の側面を持っている。オカアマは漁場に行く際は一人で行くが、その途中で何人かのオカアマに出会ったりもする。そうすると話をしながら一緒に漁場に向かう。そして浜に着くと漁の準備をするのだが、その時も近くにいるオカアマたち何人かで談笑をしながら準備をする。あるオカアマにインタビューを行っている際「みんなお友達やけん、いこー言うて誘ってな」「磯いったらつれになるで」と言っていたようにオカアマには独特の親密さがあることが伺える。こうした人付き合いの楽しみが、わざわざ片道 10 分の磯を歩き漁場へ向かい漁を行う原動力となっているのではないだろうか。

阿部におけるアワビ漁は藩政期から続くメジャー・サブシステムであるし、現在でも漁獲の主要な位置を占めている。しかしメジャー・サブシステムであると同時にこうした楽しみの要素を強く備えている。さらに言えば、こうしたメジャー・サブシステムであるアワビ漁を詳しく見ていくとオカアマのような少ない漁獲でその人たちにとっては「おかず採り」のようなマイナー・サブシステムの要素もみられる。そしてこうした楽しみの要素とは決して経済的な楽しみだけではなく、自然と深く関わることによって現れる社会的な楽しみなのである。この社会的な楽しみこそが大村（2008）の言う環境と共にあることを通して実感する悦びと幸せであり、「環境と一体化して生きる幸せを実感しながら自らのアイデンティティを確認する」（大村 2008:37）基盤なのではないだろうか。

鬼頭(2010)は自然保護の考え方が時代とともに人間中心主義から人間非中心主義へと移行していくが、人間の自然への関わり方が人間中心か人間非中心かという思想も背後には人間と自然を二項対立的に考えている西洋的なものであった。人間非中心主義思想に基づく「原生自然＝ウィルダネス」の保護により、逆に地域に生活し生業を立てて暮らしている人たちを無視した政策が行われていた。こうしたことから、自然を考えていく上で重要なのは人間と自然を二項対立的に捉えるのではなく、その土地で自然と深く関わって生きてきた人たちの「生業」こそが人間と自然のかかわりそのものであると考え、きちんとし

た考察を加えることが重要であると指摘した。阿部における海人たちの生業の実践とは、都市化した地域からの旅行者の視点に立つ思想、ひいては、人間と自然の二項対立的な図式では捉えきれない人間と自然のかかわりそのものである。そして、この視点こそが現代の自然を考える上で重要なことであり、自然に対して人間中心か人間非中心か、人間－自然という二元的に捉える次元を克服していく視点なのである。

最後に、こうした海人漁における自然との深い関わりはこれからの漁村のありかたにどのような可能性を提示するのだろうか。現在、地方では過疎高齢化が進み次世代の担い手が少なくなっている現状がある。そのような漁村ないし農村、山地集落では様々な地域おこしが行われていることも少なくない。実際、伊座利では漁村留学を積極的に行い、大勢の I ターン者を誘致し人口は増加傾向にあり高齢化率も下がってきている。一方阿部では少子高齢化により小中学校が休校に追いやられているものの、人口の約 40%が漁協組合員であり、漁村の中心的役割を担う漁協が活気づいている。海人漁の解禁日になると 100 人近くもの人が海に繰り出し海人漁を行っている。アワビ漁に深く関わり、自然から楽しみを享受することが社会に深く関わることだとするならば、長い間阿部を離れて地域コミュニティの外にいた定年退職後 U ターンしてきた人たちが再び阿部のコミュニティに深く関わっていけることを考えると重要といえよう。このことから定年退職後の高齢者、またはこれから定年退職を迎える団塊の世代の人たちのリクルートに重要な要素となってくるのではないだろうか。また、こうしたことは伊座利で見られる I ターン者にも通じるものがあるのではないだろうか。その社会に新規参入する I ターン者にとっての課題はうまく社会に入り込めるかだと考えられる。自然との深い付き合いの中にみられる諸要素から、社会にのめりこみ持続的な漁村の発展を模索していけるのではないだろうか。伊座利にみられる漁村留学もこうした自然との深い関わりを感じる大きな装置となっていくことがこれから課題であるともいえよう。

## 参考文献

- ・ Clifford Geertz 1987『文化の解釈学Ⅱ』岩波書店
- ・ 小島博、2005、「クロアワビの資源管理に関する生態人類学的研究」、『徳島県農林水産総合技術センター水産研究所 研究報告 No3』、徳島県立農林水産総合技術センター水産研究所
- ・ 小島博・山中幸夫、1983、「アワビ資源の管理について-徳島県阿部漁協の管理例」『ocean age』166号:20-26
- ・ 国土交通省国土計画局、2008、「維持・存続が危ぶまれる集落の新たな地域運営と資源活用に関する方策検討調査報告書」
- ・ 川本信之、1967、『養魚学各論』恒星社厚生閣
- ・ 鬼頭秀一、2010、『自然保護を問いなおすー環境倫理とネットワーク』筑摩書房
- ・ 松井健、1998、「マイナー・サブシステムの世界ー民俗世界における労働・自然・身体」篠原徹編『民族の技術』朝倉書店、247-268
- ・ 松井健、2004、「マイナー・サブシステムと日常生活ーあるいは、方法としてのマイナー・サブシステム論」大塚柳太郎・篠原徹・松井健編『生活世界からみる新たな人間ー環境系』東京大学出版、61-84
- ・ 三田牧、2004、「糸満漁師、海を読むー生活の文脈における「人々の知識」」『民族学研究』68(4):465-486
- ・ 大村敬一、2008、「かかわり合うことの悦び」山泰幸・川田牧人・古川彰編『環境民俗学ー新しいフィールド学へ』昭和堂、34-57
- ・ 大村敬一、2005、「差異の反復ーカナダ・イヌイトの実践知にみる記憶と身体ー」『文化人類学』70(2):247-270
- ・ 沖野舜二・川田豊彦・吉見哲夫、1956、「阿部浦のいただき行商」横山昭・田島衛編『磯漁業地帯ー徳島県「阿部・伊島」の構造ー』阿波研究叢書 第一集 阿波研究叢書刊行会、22-31
- ・ Riall W.Nolan 2007 関根久雄・玉置泰明・鈴木紀・角田宇子訳『開発人類学 基本と実践』
- ・ 菅豊、1998、「深い遊び-マイナー・サブシステムの伝承論」篠原徹編『民族の技術』朝倉書店、217-246
- ・ 由岐町教育委員会、1994、『由岐町史』